

日 本 独 文 学 会 研 究 叢 書 1 6 6

es が指し示す地平：いつ、なぜ es が現れるのか

宮下 博幸 編

一般社団法人日本独文学会

Studienreihe der Japanischen Gesellschaft für Germanistik 166

Der Horizont mit *es*: Wann und warum *es* erscheint

Herausgegeben
von
Hiroyuki MIYASHITA

JGG Tokyo

本叢書は、春季・秋季研究発表会におけるシンポジウムの記録のため、日本独文学会が（2017 年以降は学会ホームページにおいて）発表の場を提供しているものです。叢書の編集は、学会編集委員等による査読制をとらず、各編集責任者に完全に任されています。

Mit der Studienreihe (SrJGG) bietet die Japanische Gesellschaft für Germanistik den einzelnen Veranstaltern der Symposien in den Frühlings- und Herbsttagungen die Möglichkeit, die Beiträge und die Diskussionsinhalte der Symposien zu dokumentieren und (seit 2017 im Internet) zu publizieren. Die Artikel sind nicht von der JGG-Redaktion peer reviewed, sondern werden ausschließlich vom jeweiligen Herausgeber wissenschaftlich-redaktionell zusammengestellt.

目 次

宮下 博幸	
はじめに	1
宮下 博幸	
構文としての非人称の es: その広がりと機能	5
伊藤 克将	
前域の es における es 挿入の動機と認可条件をめぐって: 生成文法による分析	29
井坂 ゆかり	
主語としての相関詞 es の出現傾向: 主語文が後続する形容詞述語の実例調査から	41
田中 慎	
いわゆる「任意の es」をめぐって	55
シンポジウムにおける議論のまとめ	67

Inhalt

Einleitung	
Hiroyuki MIYASHITA	1
Das unpersönliche <i>es</i> als Konstruktion: Seine Verbreitung und Funktion	
Hiroyuki MIYASHITA	5
Zur Einfügemotivation und Lizenzierungsbedingung des Vorfeld- <i>es</i> : Eine Analyse im Rahmen der generativen Grammatik	
Katsumasa ITO	29
Mit oder ohne <i>es</i> : Eine Korpusuntersuchung zu Adjektiven mit nachgestellten Subjektsätzen	
Yukari ISAKA	41
Rätsel um das sogenannte „fakultative <i>es</i> “	
Shin TANAKA	55
Zusammenfassung der Diskussion	67

はじめに

本叢書は関西学院大学にて開催された 2025 年日本独文学会秋季研究発表会における本叢書のタイトルと同名のシンポジウム「es が指し示す地平：いつ、なぜ es が現れるのか」の成果をまとめたものである。

ドイツ語の es は単に代名詞として使用されるだけでなく、さまざまな環境に出現して多様な働きをする要素である。例えば es は相関詞として文内の節を導いたり（「相関詞の es」）、天候や時間の表現に出現したり（「非人称の es」）、前域に出現して主語が中域に置かれることを可能にしたり（「前域の es」）、さらには *es gibt, es geht* などの熟語的表現の一部として現れる（「形式主語の es」）など、極めて多様な様相を示す（Buscha 1988, Helbig & Buscha 1991, Zifonun et al. 1997, Duden 2005）。また es の様々な用法は相互につながりを見つけ出すことが困難な面があることから、その広がり体系化する試みも見られる（Leys 1979, Askedal 1990, Czicza 2014）。本叢書が対象とする es は、ドイツ語の要素の中でも出現頻度が高く、極めて重要でありながら、統一的な実態を把握することの難しい要素である。Weinrich (1993) は es の一般的な機能として、「注目 (Fokus)」が行われる際の「地平 (Horizont)」としての特徴づけを行っているが、本叢書ではこの es の指し示す「地平」の一端を解明することを目指したい。

es は以上のように多様でありながら、どの用法にも共通の問題が存在する。それはいずれも es が出現する場合と出現しない場合があり、またその狭間に es の出現が任意の場合があることである（Ogawa 2002, 2012, Miyashita 2004, Tanaka 2010）。相関詞の es に関しては従来からこの点が注目され、さまざまな動詞に関する es の生起の義務性や出現率が議論されている（Pütz 1975, Ulvestad/ Bergenholtz 1979, 1983, Marx-Moyse 1983, 井坂 2024）。非人称の es は前域に他の要素が現れても常に現れる es であり（*Morgen regnet es*）、天候を表すいわゆる非人称動詞で典型的に出現するが（Ogawa 2012）、一般的に非人称動詞とされない動詞にもこのような es が出現することにより、その出現の可能性が問題となる（*An der Tür klopft es*）。前域の es はその名の通り前域にのみ出現するが、前域が空いていれば常に出現できるわけではなく（**Es ist er gestern gekommen*）、ここでもやはり es の生起条件が問題となる（吉田 1997, 佐藤 2004, Miyashita 2014, Ito 2023）。本叢書ではどの用法にも関わるこの es の出現の問題に焦点を当て、その背後にあるメカニズムに迫ることを目標とする。

さらに以上の es には、何らかの統一性を想定することができるのかという問題がある。具体的にはそれぞれの es には代名詞や他の用法に由来する何らかのつながりがあり、何らかの段階性を経て連続体をなしていると思えるのかという問いである。本叢書の各論考は基本的に上に挙げたそれぞれの es と、そ

の出現の可否に注目するものであるため、この問いは本叢書の枠を超えるものであるが、本叢書はまた、この問いへの足掛かりとなれば幸いである。

本叢書の各論考は次のような内容となっている。

宮下論文は非人称の *es* の出現を構文文法の視点から扱うものである。まず非人称の *es* を [*es* + 動詞句] という形式を持つ構文として捉える。続いて辞書のデータをもとに、この構文の動詞のスロットに現れる動詞を意味タイプごとに分類してそれぞれを *es* 構文の下位クラスとしての動詞クラス構文とし、この動詞クラス構文の意味と整合するとき、*es* 構文が可能となるとしている。また *es* 構文に共通するのは、自然発生的でコントロールできないシーンとしての捉え方を付与する機能であるという。さらにコーパスのデータに基づいて動詞クラス構文ごとに *es* 構文の生産性について考察し、以上の *es* 構文が有する機能を満たす文脈では、通常は *es* 構文で出現しない動詞であっても、*es* 構文が拡張的に出現することがあるとしている。

伊藤論文は前域の *es* を取り上げ、生成文法の立場から、この *es* の出現の要因について考察するものである。まず前域の *es* においては、それがなぜ定動詞でなく意味上の主語と一致するのか、またなぜ前域の *es* は代名詞類と共起不可なのかという二つの問題があることが示される。生成文法においてはこれまで TP 指定部からの移動説と CP 指定部での基底生成説の二つが見られたが、このうち前者の説はより問題が多く、後者が支持されるとする。後者は前域の *es* が代名詞類と共起不可である点をうまく説明できないが、情報構造によるアプローチ、単独判断・複合判断によるアプローチといった機能的説明もうまくいかないとし、最終的に代名詞に [+Wackernagel] という素性を想定する統語的アプローチの方がより統一的な説明が可能であると論じている。

井坂論文は主語文と相関する *es*、特に形容詞述語とともに中域に出現する *es* を対象とし、コーパスデータに依拠しながら、相関詞 *es* の出現に関わる要因について扱っている。中域の *es* の出現に関わる形容詞述語のうち、20 の形容詞述語を対象に分析を行った結果、中域での *es* の出現が 8 割を超えるものと、*es* が出現しない方が多い形容詞が確認された。後者の形容詞はどれも知識関連の形容詞述語であるという。このような形容詞述語は後続の補文で新情報を導入し、共通知識を更新するものと考えられる。Paranhos Zitterbart (2002) が *es* を既出情報のシグナルとしていることからすると、*es* は新情報を導入する知識関連の形容詞述語と相性が悪いために出現しにくく、他方、前提となる命題の評価に関わる形容詞では、*es* が出現しやすかったのではないかと論ずる。

最後の田中論文は *es* の出現が任意とされる場合に注目し、その出現の背後にある原理について考察する。*es* の任意性が見られる現象として考察の対象となるのは、*lassen* 中動態と感覚・感情表現である。Ogawa (2012) は *es* が客観的環境を表すとしているが、感覚・感情表現に関してはこの見解がおおむね正しいと

される。しかし同じく任意の *es* が確認される *lassen* 中動態においてはこれがあてはまらないという。Jakobs (2022) で提示された項の解釈を適用することで、任意の *es* は項としての性質を持つ任意項である状況句 (Zirkumstanzen) の空項と見なすことができる。これに従えば文中に他の規定がない場合には空項としての *es* が現れるが、他の具体的な規定がある場合は *es* の出現がブロックされると説明できる。また出現する任意の *es* は時、場所、原因などの状況を一般的に設定する要素と考えることができ、これは Ogawa の見解にも通じるとしている。

以上のように、本叢書の各論考はそれぞれ異なる *es* の用法を対象としながら、いずれも *es* の用法で問題となる出現・非出現の問題に対し、構文文法、生成文法、コーパスと情報構造、複数の統語理論に依拠し、それぞれのアプローチで取り組んでいる。もちろんそれぞれのアプローチが絶対的というわけではないものの、どのような用法の *es* を問題にするかによって、相性のよいアプローチがあるように思われることも事実である。以上の論考では複数のアプローチ間の比較をメインにするものではないが、全体として多様な *es* を記述する際のアプローチの相性をも示すものとなっていると考える。

なお本叢書のもととなる日本独文学会のシンポジウムにおいては、コメンテーターとして小川暁夫氏をメンバーとしていたが、体調上の理由で当日参加できなかったことは残念であった。ただしシンポジウムの事前準備の段階では、小川氏から各発表者に対して様々なコメントをいただくことができた。それらのコメントが、本叢書の内容に大いに生かされている。ここに小川氏への謝意を記したい。

文献

- Askedal, John Ole (1990): Zur syntaktischen und referentiell-semantischen Typisierung der deutschen Pronominalform *es*. In: *Deutsch als Fremdsprache* 27, 213-225.
- Buscha, Joachim (1988): Die Funktionen der Pronominalform *es*. In: *Deutsch als Fremdsprache* 25, 27-33.
- Czicza, Dániel (2014): *Das es-Gesamtsystem im Neuhochdeutschen. Ein Beitrag zu Valenztheorie und Konstruktionsgrammatik*. Berlin: de Gruyter.
- Duden (2005): *Die Grammatik. Unentbehrlich für richtiges Deutsch*. Mannheim: Bibliographisches Institut & Brockhaus.
- Helbig, Gerhard/Joachim Buscha (1991): *Deutsche Grammatik. Ein Handbuch für den Ausländerunterricht*. Berlin et al.: Langenscheidt/Verlag Enzyklopädie.
- 井坂ゆかり (2024): 現代ドイツ語の目的語としての相関詞 *es* の出現／非出現と選択制限. 博士論文. 東京外国語大学.
- Ito, Katsumasa (2023): Zur Syntax vom Vorfeld-*es* im Deutschen: Eine Labeling-basierte

- Analyse. In: *Linguisten-Seminar: Forum japanisch-germanistischer Sprachforschung*, 5, 93–107.
- Jakobs, Joachim (2022): Zirkumstantien sind Argumente. Unpubliziertes Manuskript. <https://www.researchgate.net/publication/362569651>.
- Leys, Odo (1979): Zur Systematisierung von *es*. In: *Deutsche Sprache* 7, 28-34.
- Marx-Moyse, Janine (1983), *Untersuchungen zur deutschen Satzsyntax: es als vorausweisendes Element eines Subjektsatzes*. Wiesbaden: Steiner.
- Miyashita, Hiroyuki (2004): *Es* in der Subjektposition – Eine kognitiv-linguistische Erklärung. In: Herwig, R. (Hrsg.): *Sprache und die modernen Medien: Akten des 37. Linguistischen Kolloquiums 2002 in Jena*, Frankfurt: Peter Lang, 27-36.
- Miyashita, Hiroyuki (2014): German *es* – a Construction Grammar approach. In: *Yearbook of the German Cognitive Linguistics Association* 2, 10.1515/gcla-2014-0010.
- Ogawa, Akio (2002): Wie grenzen unpersönliche Konstruktionen an persönlichen an? Eine kontrastiv-typologische Studie. In: Die japanische Gesellschaft für Germanistik (Hrsg.): *Grammatische Kategorien aus sprachhistorischer und typologischer Perspektive: Akten des 29. Linguisten- Seminars*, München: iudicium Verlag, 142-153.
- Ogawa, Akio (2012): Zur Typologie der Witterungs-, Klima- und daran angrenzenden Prädikate – unter besonderer Berücksichtigung des Deutschen und des Japanischen. In: Redder, A. /A. Ogawa/ S. Kameyama (Hrsg.): *Unpersönliche Konstruktionen. Prädikatsformen funktional und sprachübergreifend betrachtet*, München: iudicium. 201-212.
- Paranhos Zitterbart, Jussara (2002): Zur Mittelfeldfähigkeit des Korrelats „*es*“ in Verbindung mit Subjektsätzen. In: *Sprachwissenschaft* 27, 149-195.
- Pütz, Herbert (1975): *Über die Syntax der Pronominalform ‚es‘ im modernen Deutsch*. Tübingen: Narr.
- 佐藤清昭 (2004): 「Es による「文の非人称化」—その実際と関口存男の功績—」『ドイツ語学研究』11, 1-23.
- Tanaka, Shin (2010): Kombinatorik zweier „Personensysteme“: zur Universalität der „Unpersönlichkeit“. Vortrag beim 12. IVG-Kongress 2010 Warschau.
- Ulvestad, Bjarne & Hennig Bergenholtz (1979): *Es* als Vorgreifer eines Objektsatzes. In: *Deutsche Sprache* 7, 97-116.
- Ulvestad, Bjarne & Henning Bergenholtz (1983): *Es* als „Vorgreifer“ eines Objektsatzes. Teil II. In: *Deutsche Sprache* 11, 1-26.
- Weinrich, Harald (1993): *Textgrammatik der deutschen Sprache*. Baden-Baden: Olms.
- 吉田光演 (1997): 「ドイツ語の虚辞 *es* の統語論」『言語文化研究』23, 73–89.
- Zifonun, Gisela / Ludger Hoffmann / Bruno Strecker (1997): *Grammatik der deutschen Sprache*. Berlin: de Gruyter.

構文としての非人称の es : その広がりと機能

宮下 博幸

1. はじめに

ドイツ語において es は多様なコンテキストで用いられるが、本稿はいわゆる非人称の es を対象とする。本稿で扱う非人称の es とは、前域に他の要素が現れても統語的に常に生起する es であり、典型的には次のような天候を表す動詞で出現する。

- (1) a. Gestern schneite es sehr viel.
- b. Heute Nachmittag hagelte es.

この es はこれらのいわゆる非人称動詞のみならず、さらに次の例のような一般的に非人称動詞とされない動詞でも出現する。

- (2) a. Thomas klopfte an der Tür.
- b. An der Tür klopfte es.

動詞 *klopfen* は (2a) のように作動者 (Agens) を表す主語を取りうるが、(2b) のように天候を表す動詞と同様の統語的性質を持つ es とともに用いることも可能である。

- (3) a. Anna arbeitet in München.
- b. *In München arbeitet es.

しかしこのような es はすべての動詞と共起するわけではない。動詞 *arbeiten* は作動者の主語とは共起するが、(3b) のように es とは共起しない。本稿はこの es がどのような動詞とともに現れるのか、またこの es はどのような条件のもとで (≒なぜ) 出現可能なのかという問いに対して、構文文法に依拠して答えることを目指したい。以下の構成は次のとおりである。まず 2. では非人称の es がどのような動詞とともに用いられるのかについて言及した先行研究を確認する。3. では本稿の枠組みをなす構文文法の導入を行い、この枠組みをもとに非人称の es を構文として位置づける。4. では辞書の記述を利用することで、es 構文が用いられる動詞のタイプに関して考察する。さらに 5. では es 構文の生産的な使用について扱う。最後に 6. で、本稿の結論と展望について述べる。

2. 先行研究

非人称の *es* は特に天候を中心とする自然現象との関連で取り上げられることが多く (Ogawa 2002, 2012, Duden 2005)、それがどのような動詞と共起するかという点について言及している研究はそれほど多くない。ここではそのような言及がある研究のうち、Weinrich (1993) と Helbig & Buscha (1991) を見てみたい。

Weinrich (1993) はまず *es* が「状況的地平 (situativer Horizont)」を表すとし、その下位区分として自然地平、時間地平、身体・精神地平、感覚地平、社会地平の5つを挙げている。¹

(A) 自然地平 (Natur-Horizont)

(4) Es regnet/schneit/hagelt/blitzt/donnert/friert/stürmt/blüht/zieht/ist kalt/ist schön.

(B) 時間地平 (Zeit-Horizont)

(5) a. Es ist noch früh/sieben Uhr/tiefe Nacht/(höchste) Zeit.

b. Es dauert noch lange.

(C) 身体・精神地平 (Leiblich-seelischer Horizont)

(6) a. Wie geht es Ihnen?

b. Tut es Ihnen immer noch weh?

c. Wie steht es mit Ihrem Examen?

(D) 感覚地平 (Sinnes-Horizont)

視覚 (Gesichtssinn)

(7) Es blendet/glänzt/ist hell.

聴覚 (Gehörsinn)

(8) Es klopft/schellt/klappert/dröhnt/pfeift/knallt/lärmt/raschelt/läutet.

味覚 (Geschmackssinn)

(9) Es schmeckt (gut, schlecht, süß, salzig).

嗅覚 (Geruchssinn)

(10) Es riecht (gut, schlecht, nach ...)/duftet (nach)/es stinkt.

触覚 (Tastsinn)

(11) Es drückt/juckt/kribbelt/läuft mir kalt über den Rücken.

(E) 社会地平 (Gesellschafts-Horizont)

(12) a. Seid ihr gerne an der Ostsee? Ja, es ist immer recht nett in Warnemünde.

b. Wie steht es? Es steht jetzt 4:2.

¹ Weinrich は独自の用語である「地平」を「注目 (Fokus)」という概念との関連で位置づけ、*es* を「注目 (Fokus)」が行われる際の「地平 (Horizont)」を提供するものとして特徴づけている。

以上の5つの地平は、それぞれ非人称の *es* が出現する動詞の意味グループと解釈可能である。すなわち *es* は自然、時間、身体・精神、感覚を描写する状況で出現すると言える。² しかしながらここで挙げられている地平は例示的なものであり、これらの意味グループが非人称の *es* が現れる場面を網羅しているかについては、さらなる調査が必要と考えられる。

Weinrich (1993) が非人称の *es* が出現する際の述語の意味に注目していると考えられるのに対し、Helbig & Buscha (1991) は、非人称の *es* が統語的にどのような要素と共起するかという観点から、非人称の *es* が出現する場合として以下の6つのグループを挙げ、また部分的にそれぞれのグループに現れる動詞の意味グループについて言及している。

(A) 項のない動詞 (Verben ohne Aktanten)

(13) a. Es hagelte ganz heftig. (自然現象)

b. Es hat an der Tür geläutet. (騒音)

(B) 形容詞の述語内容語を伴うコピュラ動詞 (Kopulaverb mit adjektivischem Prädikativ)

(14) a. Es ist schon dunkel geworden. (自然現象)

b. Es ist schon sehr spät. (時間現象)

(C) 人の対格目的語を伴う動詞 (Verben mit personalem Akkusativobjekt)

(15) a. Es schüttelt mich.

b. Es juckt mich.

(D) 人の与格目的語を伴う動詞 (Verben mit personalem Dativobjekt)

(16) a. Es geht ihm gut.

b. Es hat mir in Ungarn gefallen.

(E) さまざまな目的語を伴う動詞 (Verben mit verschiedenen Objekten)

(17) a. Es gibt noch einen ungeklärten Punkt.

b. Es bedarf noch einiger Mühe.

(F) 二つの副詞規定語を伴う再帰動詞 (Reflexives lassen mit zwei Adverbialbestimmungen)

(18) Hier lässt es sich gut arbeiten.

以上から、自然現象、騒音、時間現象は項を必要としない動詞やコピュラ動詞といった自動詞で出現し、身体感覚や気持ちに関わる現象は目的語を取る動詞で出現するという、意味と統語構造の結びつきが推測される。しかし実際にこの結びつきがどのようなになっているかに関しては特に言及されておらず、さらに検

² 地平のうち (E) の社会地平に関しては、動詞の意味グループを示したものという解釈は困難である。

討する必要がある。

以上の二つの研究から、非人称の *es* がどのような意味を持つ述語のグループと共起し、またその際どのような統語構造が見られるかについては、さらなる体系的な研究が必要であることがわかる。本稿ではこの点を構文文法の枠組みに依拠しつつ明らかにしていきたい。

3. 枠組み：認知構文文法

認知言語学における構文文法にはさまざまなヴァリエーションが存在するが (Ziem/Lasch 2013)、どれも意味と形式のペアである構文を言語記述の基本単位とするという点では共通している。本稿ではそのうち Goldberg (1995, 2006, 2019) が提案する認知構文文法 (以下単に構文文法とする) に基づいて、非人称の *es* の記述を試みたい。ここではまず構文文法の前提を確認し、またその前提から非人称の *es* がどのように捉えられるかを示したい。そして構文文法の観点からの本稿の課題を改めて整理する。

構文文法では語のみならず、統語的な構造パターン自体にも意味が想定され、統語パターンも意味と形式のペアである構文として扱いうるとされる。一例として、Goldberg (1995) が挙げる、英語の二重目的語構文の例を見てみたい。

英語の二重目的語構文 (Goldberg 1995: 142 を簡略化)

意味	CAUSE-RECEIVE < agt rec pat >			
統語	V	SUB	OBJ	OBJ2

ここでは「主語 (SUB)・動詞 (V)・目的語 (OBJ)・第2目的語 (OBJ2)」という統語構造が全体で「受け取らせる (CAUSE-RECEIVE)」という意味を持ち、またその作動者 (agt) が主語、受取者 (rec) が目的語、被作動者 (pat) が第2目的語に対応することが示されている。

二重目的語構文には以上のように主語、目的語、第2目的語という3つのスロットがある。構文文法のさらなる前提として、このような構文のスロットにどのような要素が現れうるかには (意味的な) 制限があり、その制限がその構文の使用の可否を決定すると考える点が挙げられる。次の例を見てみよう。

(19) *Bill threw the coma victim a blanket. (Goldberg 1995: 146)

この例はなぜ非文となるのだろうか。構文文法では非文の理由が構文のスロットの制限にあると想定される。すなわち英語の二重目的語の一つ目の目的語の

スロットには *the coma victim* のような意思を持たない対象は許容されず、必ず意思を持つ受取者 (*willing recipient*) である必要があるという制限があるとされる。

構文文法のさらなる前提としては、構文は意味的な条件が整えば、非本来的な要素とも融合して使用されうるという点が挙げられる。これはしばしば構文による強制 (*coercion*) という観点から論じられ、構文の生産性に関わる。次の例を見てみたい。

(20) *She baked Pat a cake.* (Goldberg 1995: 35)

(21) *Sam sneezed the napkin off the table.* (Goldberg 1995: 29)

(20) は二重目的語構文の例である。ここでは二重目的語構文が 2 価の他動詞 *bake* とともに用いられているが、この動詞自体は目的語で現れる名詞句の生産を表す動詞であり、意味的に見て、本来は受取者を取らないと考えられる。それゆえ二重目的語構文には出現しないことが想定されるが、それにも関わらずこの文は可能である。これはこの動詞が二重目的語構文に融合されることで、受取者の項が、この動詞の意味から見て可能な読みである受益者として解釈される余地があるためである。構文との融合により、このような解釈に強制されることで、*bake* が二重目的語構文に出現可能となる。(21) は使役移動構文の例であるが、ここでは 1 価の自動詞である *sneeze* が使われ、また目的語 (*the napkin*) も出現している。このような文が可能なのは、使役移動構文が全体で「主語が動詞で表される動作により、目的語を前置詞句で表されている方向に移動させる」という意味を持ち、この構文の動詞のスロットに *sneeze* が融合することで「*sneeze* することで目的語を前置詞句で表されている方向に移動する」という解釈が成り立つためと説明することができる。これも構文による強制の一例と言える。

では統語的な構文パターン自体に意味を想定する構文文法の立場からすると、非人称の *es* はどのように特徴づけられるだろうか。この立場に立つなら、ドイツ語の *es* もそれに続く動詞とともに統語的な構文を形成していると考えられ、またさらに構文特有の意味を有していると仮定できる (Miyashita 2003, 2014, Czicza 2014)。

このように非人称の *es* を構文として捉えるなら、*es* 構文の形式として、まず次のようなものを考えることができる。

(22) [*es* 動詞句]

ここで *es* は前域の *es* や *Korrelat* の *es* とは異なって統語的な位置に関係なく常に現れ、動詞は *es* との人称の一致が見られて、主語と見なせる他の要素は

出現しない。³ また上で見た二重目的語構文や使役移動構文では動詞のみが単独で動詞のスロットに入ったが、この構文の動詞のスロットは目的語をも含めた述語部分、すなわち動詞句が入るスロットという点で異なっている。このような形式をとる構文を以下では「es 構文」と呼ぶことにする。

この es 構文を想定することの利点としては、まず es と同時に現れる述語を含めた全体で構文をなすと考えすることで、他の es の使用と異なる、独立した意味を持った分析単位として特徴づけられることが挙げられる。さらに構文文法が主張するように、es 構文がどのような動詞を含む動詞句とどの程度共起するのかという生産性の観点からの分析が可能となる。これは冒頭に述べた問題提起に答えるのに極めて有用なアプローチである。この構文文法的な観点を前提とするなら、本稿の問いは、1) どのような動詞が動詞のスロットに現れうるのか、2) es 構文が出現可能な動詞の意味領域はどのようなものか、3) es 構文の拡張をライセンスする条件は何か、という形にまとめることができる。以下ではこれらの問いに答えることを目指したい。

4. 非人称の es を伴う動詞：辞書に基づく分析

以上の 1) の問いについては、es 構文が一般的にどのような動詞とともに出現するかを知る必要がある。本稿ではまず辞書の記載をもとに、この点について調査したい。非人称で使われる動詞の表示がなされている辞書はそれほど多いわけではないが、Langenscheidt の *Großwörterbuch Deutsch als Fremdsprache* (2008) には非人称動詞 (imp.) の記載があり、また電子版を使用することでそれらの抽出が容易であるため、ここではこの記載をもとに es 構文に出現する動詞を分析する。分析にあたっては出現する動詞の意味タイプと、それぞれの意味タイプの統語的特徴に注目する。

Langenscheidt (2008) には非人称動詞と記載される 126 の動詞があったが、そのうち es が必ず現れる 78 の動詞を分析対象とした。その結果、es 構文に現れる動詞は大きく分けて 8 つの意味タイプに分類された。その 8 つの意味タイプとは自然現象、騒音、出来事の成否、欠乏、身体状態、身体感覚、存在、必要性であった。それぞれの内訳は以下のとおりである。

³ そのため *Es kam eine Meldung* のような文は非人称の es 構文の例ではなく、前域の es として区別される。また *Es juckt mich* と *Es wundert mich* は構造的には並行して理解されるが、後者は通常、es の内容と見なせる *dass* 文が後続することから、Korrelat の es として区別される。Korrelat の es との対比から、非人称の es 構文の特徴としてさらに es が具体的な指示対象を持たないことが挙げられる。

自然現象 (48)	61.5%
騒音 (11)	14.1%
出来事の成否 (5)	6.4%
欠乏 (4)	5.1%
身体状態 (3)	3.8%
身体感覚 (3)	3.8%
存在 (3)	3.8%
必要性 (1)	1.3%

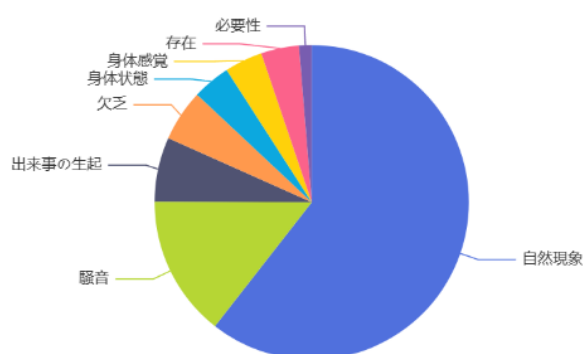


表 1：辞書記載の非人称動詞の意味グループごとの動詞の数の割合

次にそれぞれの意味タイプの具体例について見ていきたい。まず自然現象であるが、自然現象には以下のような多様な現象が含まれる。

天候 (19)	39.6%
時間帯現象 (4)	8.3%
気温現象 (4)	8.3%
騒乱 (3)	6.3%
植物成長 (2)	4.2%
通気 (2)	4.2%
飛散 (2)	4.2%
超自然現象 (2)	4.2%
時間現象 (2)	4.2%
発酵 (1)	2.1%
発煙 (1)	2.1%
沸騰 (1)	2.1%
脱落 (1)	2.1%
燃焼 (1)	2.1%
発香 (1)	2.1%
季節現象 (1)	2.1%
蠢動 (1)	2.1%

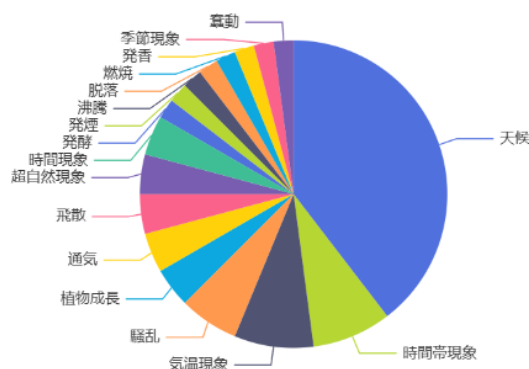


表 2：辞書記載の自然現象の下位意味グループの動詞の数の割合

表 2 からわかるように、自然現象のうちでは天候に関わるものが 39.6%を占めて

おり、自然現象のうちでも典型的なグループであることがわかる。⁴ 天候動詞の具体例は以下のとおりである。⁵

- (23) a. Es blitzt und donnert.
b. Es regnet sehr viel.
c. Es wetterleuchtet.

次に太陽の出没に関わる時間帯現象を表すものとして、以下の例に見る動詞が確認された。⁶

- (24) a. Es fängt an zu dämmern.
b. Es hat rasch gedunkelt.

これらの文で表される事象は、太陽の出没の作用による視覚的な明暗の変化に関わる自然現象である。これらの事象は天候とは異なるものの、空における視覚的状态を表すという点では天候に近い面がある。

次の気温現象も天候と密接に関わるもので、天候や季節の変化⁷によって引き起こされる外界の温度変化、またそれによる作用に関わるものである。⁸

- (25) a. Heute Nacht hat es gefroren.
b. Über Nacht hatte es angefangen zu tauen.

さらに天候には直接は関わらないと考えられるものの、以下のような様々な自然現象が *es* 構文で用いられる。⁹

⁴ 非人称の *es* を論じる際に天候動詞が中心となる傾向があるのはこのことに起因していると考えられる。

⁵ 確認された天候に関わる動詞は以下のものであった：*aufreißen, blitzen, durchregnen, einschlagen, gewittern, gießen, hageln, hereinregnen, hereinschneien, hineinregnen, nieseln, regnen, schiffen, schneien, schütten, stürmen, tröpfeln, wetterleuchten, donnern* 当該の辞書には記載がないものの、これらに加え天候を表す *sonnig* や *bewölkt* といった形容詞も、*sein* を伴って *es* 構文で用いられる。なお文例は辞書に掲載されていなかった場合は作例による（以降も同様）。

⁶ 確認された動詞は以下のものであった：*dämmern, dunkeln, dunkel/hell sein/werden*

⁷ 季節の変化を表す動詞は当該の辞書には非人称動詞としての記載がなかったが、*wintern, sommern, herbsten* などすべて *es* 構文で用いられる。また表2で季節現象としている動詞は *weihnachten* である。

⁸ 確認された動詞は以下のものであった：*frieren, tauen, kalt/heiß sein/werden*

⁹ これらは様々な個別の自然現象に対応しており、それぞれのタイプに含まれる動詞は一つもしくは二つであった。

植物成長：

(26) Es blüht und grünt.

発酵：

(27) Es gärt bald wieder im Keller.

通気：

(28) Hier zieht es.

発煙：

(29) Es raucht in der Küche.

飛散：

(30) a. Bei dieser Trockenheit staubt es sehr.

b. Es spritzte, als er das Steak in die Pfanne legte.

沸騰：

(31) Es kocht in der Küche.

燃焼：

(32) Bei ihm brennt es.

脱落：¹⁰

(33) Beim Öffnen der Klappe ist es ausgerastet.

また通常の自然現象のみならず、幽霊の出没といった超自然現象も es 構文で出現する。¹¹

超自然現象：

(34) Es spukt/geistert im alten Schloss.

不穏な状況（騒乱）の生起を表す際にも es 構文が観察される。

騒乱：

(35) a. In der Partei kriselt es.

b. Unter der Bevölkerung brodeln es.

¹⁰ (33) の例に見て取れるように、「脱落」は人によって引き起こされることも多いと思われるが、脱落自体は人の意思と無関係に生じるという点で自然現象的である。また *ausrasten* は技術的な「脱落」の意味の他に、話し言葉では *Es rastete bei ihm aus*（彼はキレた）のように比喩的に感情的な意味で用いられる。当該の辞書ではこの意味（die Nerven verlieren und sich plötzlich aggressiv oder sonderbar verhalten）しか記載がなかったが、Duden (2011) では技術語（Technik）として *sich aus einer ineinandergreifenden Befestigung lösen, herauspringen* とある。

¹¹ 超自然現象もその現象のコントロールの主体が不明で、人の意思とは無関係に生起するという点で自然現象と共通しているため、ここでは自然現象の一種とした。

不穏な状況が生じる場合には人が関与している場合も多いが、その状況の生起にはそれを見守る人の意思が関与することはなく、半ば自然現象のように把握される。

以上の広い意味での自然現象には共通して [es V (Lokativ)] という典型的な統語的特徴が見られる。自然現象は動詞に加え、(35) の例のようにさらに場所句 (Lokativ) が生起する形で用いられることが多い。¹²

自然現象でその他の統語パターンを示すものとしては、発香、時間現象、蠢動が挙げられる。次がその例である。

発香：

(36) Es duftete nach Blumen.

時間現象：

nicht mehr lange hin sein, dauern

(37) a. Es ist nicht mehr lange hin.

b. Es wird 20 Minuten dauern.

蠢動：

(38) Im Schwimmbad wimmelte es von Kindern.

発香現象においては、(36) のようににおいの出どころが *nach* を伴う前置詞句によって表される ([es V nach Dativ (においの出どころ)])。時間現象も一種の自然現象と捉えられる。時間現象では (37a) のようにコピュラ動詞が時間を表す述語内容語とともに出現したり ([es V (= Kopula Prädikativ)])、(37b) のように時間を表す対格目的語とともに現れる ([es V (Akkusativ)])。 (38) の蠢動にはうごめく対象が関わるが、予測できない動きを伴う点で自然現象的であると考えられる。うごめく対象は *von* を伴う前置詞句で表される ([es V von Dativ (うごめくもの)])。以上のような若干の例外はあるものの、自然現象は基本的に [es V (Lokativ)] という統語構造で出現する。

次に騒音のタイプについて見てみたい。このタイプの動詞の例は以下の通りである。¹³

¹² これは自然現象を伝達する際の状況と密接に関わっていると考えられる。自然現象について報告する場合の一つには、話し手が目の前で見ている事象を報告する場合がある。この場合は聞き手もその場において状況を共有していると考えられるので、事象が生起する場所を明示する必要は必ずしもない。もう一つの場合として、話し手が目下見ていない、もしくは聞き手が共有していない事象について報告する場合がある。その場合はどこでその事象が生じるのかの表示がないと、情報の不足が生じる。このような場合は場所句の必須度が高まると考えられる。

¹³ このタイプの動詞には次のものが見られた：*gongen, klingeln, klopfen, knacken, krachen, läuten, rumpeln, rumsen, schellen, scheppern, bumsen, poltern*

- (39) a. An dieser Kreuzung hat es schon oft gekracht.
 b. Draußen schellt es.
 c. Im Nebenzimmer hat es gepoltert.

これらの動詞はどれも音の放出に関係している。¹⁴ 表 1 で分かる通り、このタイプの動詞は自然現象に次いで多く、es 構文に現れる動詞のもう一つの典型と言える。このタイプで見られる統語構造は、自然現象の典型的な場合と同様に [es V (Lokativ)] である。¹⁵

以上の自然現象や騒音に加え、さまざまなタイプの事象が es 構文で現れる。まず以下のように出来事の成否を表す場合がある。¹⁶

- (40) a. Mit ihm geht es abwärts.
 b. Mit ihm sieht es schlecht aus.
 c. Mit meiner Gutmütigkeit ist es jetzt endgültig aus!

このタイプには通常出来事の成否に関わってトピックとなる対象が *mit* を伴う前置詞句 ([es V mit Dativ (トピック)]) で出現する。

欠乏を表す場合にも、次のように es 構文が現れる。

- (41) Es gebricht/fehlt/hapert/mangelt ihm an Fantasie.

このタイプでは通常、欠乏しているものが *an* を伴う前置詞句で表される。また前置詞句に含まれる名詞句を所有していない対象 (非所有者) が与格で出現することもある ([es V (Dativ (非所有者)) an Dativ (欠けたもの)])。

身体状態も次のように es 構文で現れる。

- (42) Mir geht es ganz gut/schlecht.

このタイプでは、表される身体状態の経験者が与格で表される ([es V Dativ (経験者)])。また以下の例のような身体に生じてくる感覚においても、es 構文が出

¹⁴ (39a) の *krachen* や *bumsen*, *rumsen*, *scheppern* のように、音の放出に付随する衝突の解釈が前景化している動詞もある。

¹⁵ 騒音のタイプは辞書の定義に *irgendwo* が含まれるものが散見されることから、場所句を伴うことが多いようである。例えば *bumsen* は *irgendwo bumst es*, *knacken* は *irgendwo knackt es* という形で記載されている。騒音動詞が場所句を取りやすいのは、音はそれが生じている場所の属性として言及されることが多いためと考えられる。

¹⁶ このタイプの動詞には次のものが見られた：*nicht weit her sein*, *abwärts gehen*, *aufwärts gehen*, *aussehen*, *aus sein*

現する。¹⁷

(43) Es juckt/kribbelt mich auf dem Rücken.

このタイプの動詞のうち、*kribbeln* は *Es kribbelt mir/mich in der Nase* のように与格と対格の経験者が共に可能であるが、*jucken*, *beißen* や *kitzeln* (辞書には掲載なし) においては、経験者は通常対格のみで現れる。また身体を感じる場所は場所に応じて *auf*, *an*, *in* 等を伴う場所を表す前置詞句が出現することもある ([es V Akkusativ/Dativ (経験者) (Lokativ)])。

さらに存在を表す場合にも次のように *es* 構文が現れる。¹⁸

(44) a. Damals gab es noch kein Telefon.

b. Es setzt Prügel.

ここでは存在する対象が対格で表される ([es V Akkusativ (存在物)])。

最後に必要性も *es* 構文で表される。

(45) Es hätte nur eines Wortes bedurft und ich hätte ihr verziehen.

ここでは属格目的語が必須となる ([es V Genitiv (必要とされる対象)])。

以上の観察から、*es* 構文が出現するのは、上で見たような意味タイプに属する動詞の場合であることが見て取れる。¹⁹ さらに以上ではまた、それぞれの意味タイプにはそれぞれ典型的な統語構造が見られることも明らかとなった。すなわち *es* 構文は統語構造とペアとなってそれぞれの動詞の意味タイプに対応していると考えられる。この意味と統語構造のペアは、*es* 構文の下位クラスとしての「動詞クラス構文」(Croft 2003) と見なすことができる。*es* 構文とその動詞クラス構文の関係は次のように表される。

¹⁷ ここには身体に生じてくる感覚のうち、痒みやくすぐったさを表す動詞のみが属している。当該の辞書には非人称動詞としての記載がないが、*Es tut mir am Kopf weh* のように痛覚も *es* 構文で現れうる。

¹⁸ (44b) は一般的に存在を表すものではなく、対格目的語として現れる存在物は *Hiebe*, *Ohrfeigen* などの打撃を表す表現であり、こういった文は打撃の存在を予告することによる脅しとして用いられる。

¹⁹ これは上に見たような意味タイプの述語であれば必ず *es* 構文で用いられるということの意味しない。5. で見るように、それぞれの意味タイプの述語は別の構文でも用いられる。

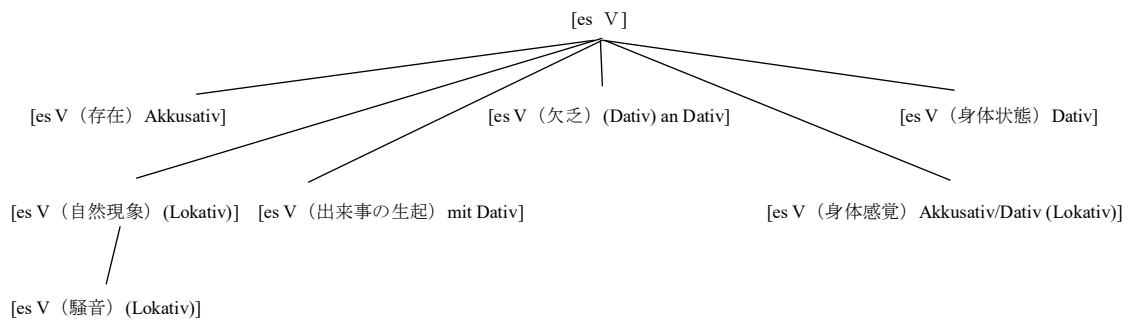


図 1 : es 構文とその動詞クラス構文

以上で見たように、騒音のタイプは基本的に自然現象と同様の統語構造をとっていた。騒音は主体によって意図的に引き起こされることもあるため、厳密には自然現象とは異なるが、音の出どころが背景化し、生じている音のみに注目する場合、自然現象に近いものとして把握されることが考えられる。²⁰ そのため図 1 では騒音を自然現象の拡張として自然現象の下に配置している。

es 構文は基本的に以上の意味タイプに属する述語と整合する構文と考えられる。²¹ このことから (3b) の *In München arbeitet es* がなぜ不可となるかを説明することができる。すなわちこの文は動詞のスロットの *arbeiten* が以上の意味タイプに属する動詞でないため、es 構文の動詞のスロットに入らないと考えることができる。²²

では以上の es 構文における動詞クラス構文の意味グループ全体に共通する意味的な特徴はあるだろうか。この構文に出現する例はどれも [-Agens] と特徴づけることが可能である。すなわちこの構文に典型的に出現するのは、天候動詞のように作動者が存在しない自然発生的な事象であるか、騒音動詞などのように作動者が完全に背景化されて把握されている事象である。後者の場合、特に es 構文が自動詞と融合するときには、作動者の背景化という点で次のような非人称受動構文と重なる部分がある。

(46) a. Schon in der Antike wurde (von den Zuschauern) geklatscht.

b. Hier wurde (von den Leuten) gearbeitet.

²⁰ 自然現象の *Es donnert* は、自然現象と同時に騒音とも考えられる。

²¹ もちろん辞書に記載から漏れていた他の意味タイプが見られる可能性もある。例えば Weinrich (1993) は (9) で *schmecken* の例を挙げているが、上のタイプではおそらく身体状態もしくは身体感覚に分類可能と思われるものの、当該の辞書にはこの動詞を非人称動詞として記載していない。es 構文に現れる統語構造に関しても、さらに加わる可能性がある。例えば Weinrich が触覚の例として挙げていた (11) に見られる統語構造は、上の分析では扱われていない (図 1 参照)。

²² しかし (47b) のように *arbeiten* が es 構文と融合する場合もある。これに関しては次の注を参照。

しかし *es* 構文と非人称受動構文には大きな相違がある。非人称受動においては背景化される作動者がなお存在しており、(45) のように *von* 句として実現することが可能であるが、*es* 構文では次のように *von* 句の出現が不可能である。

- (47) a. Plötzlich das Unberechenbare: Von links fliegen mit Schwung Eier heran. Es klatscht (*von den Eiern), es spritzt. Stoiber ist gelb. (profil, 12.08.2002)
b. Für die 20-Jährige Studentin Sophia Ziese hat sich das Wochenende gelohnt: „Es arbeitet (*von mir) in mir und ich fühle mich gestärkt“, findet die Stipendiatin der Heinrich Böll Stiftung.
(<https://www.boell.de/de/2019/03/28/luxus-fuer-rueckschau-und-blick-nach-innen>, 最終閲覧日 2026 年 9 月 3 日)

(47) では (46) と同様の動詞が用いられているが、(47) では作動者が完全に背景化されるか、全く想定されず現象のみが描出され、そのため作動者句を加えることはできない。²³ このことから非人称受動は作動者を背景化して出来事に注目を与える形式だが、*es* 構文は作動者不在の自然発生的な出来事としての見方を動詞の意味に付与する形式であると考えられる。*es* 構文が典型的に出現する自然現象はそもそも作動者もしくは人の意思と無関係な自然発生的（自発的）事態であり、人の意思が介在する出来事の外側にあるシーンである。この点で通常の人々の意思が関わるシーンと区別される（Miyashita 2004 参照）。*es* 構文は動詞で表される出来事にそういった自然発生的なシーンとしての捉え方（*construal*）を付与する機能を持つ形式とみなすことが可能であり、この機能が *es* 構文に共通して見られる意味であると言えよう。そのため例えば *Es setzt Prügel* という文では話者が打撃行為を行う潜在的な作動者であるが、それをあえて自然発生的な事態として表現することで、不可避性を効果的に際立たせていると言える。

以上では主に Langenscheidt (2008) の記述をもとに、*es* 構文の有する動詞クラス構文や、*es* 構文の意味的特徴づけについて考察してきた。次に構文文法的な視点で重要となる、構文の生産性に目を向けてみたい。動詞クラス構文のうちにはすでに慣用化して生産性が乏しいものと、非本来的な動詞への拡張的な使

²³ (3b) が非文となるのに対して、(46b) では *arbeiten* が *es* 構文で用いられている。ここでは「私の中で考えが熟成する」といった意味で用いられている。*arbeiten* は (3b) のように *in München* のような前置詞句とともに用いられると、我々が有するフレーム知識に基づき「働く」という労働の意味が前景化し、またそこでは作動者が前提とされるが、(46b) では *es* 構文と *arbeiten* が融合することで、自然発生的な無意識な作用が前景化されるために可能となると考えられる。その際に *arbeiten* が *Das Herz arbeitet* や *Die Maschine arbeitet leise* のように自発的な作用による進展を表すことができることも、*es* 構文による拡張を可能とする背景にあると考えられる。これは以下でも見るように、*es* 構文による強制（*coercion*）の事例とみなすことができる。

用が可能な生産的なものがあると考えられる。以下ではそれぞれの動詞クラス構文がどの程度生産性を持つのかを探ってみたい。

5. 考察：es 構文の拡張的使用

ここではそれぞれの動詞クラス構文がどの程度生産性を持つのか、非本来的な動詞への拡張的な使用が可能なのかを検討するが、その際、es 構文に出現する動詞クラス構文の動詞がどの程度、他の構文で用いられるのかという点にも注目したい。その際のデータとしては Das Leibniz-Institut für Deutsche Sprache (IDS) が提供する DeReKo ならびに google の検索結果を利用する。

まず自然現象が表される際に出現する動詞について見る。ここにはまず本来的に es 構文と共起すると考えられる *blitzen*, *gewittern*, *hageln*, *hereinregnen*, *hereinschneien*, *nieselnd*, *regnen*, *schneien*, *wetterleuchten*, *donnern* といった動詞が見られた。これらは基本的に天候に関わる動詞と言える。²⁴ これらの動詞に加え、自然現象を表す動詞には次のように自動詞として通常の項を主語に取るものが多く見られる。

- (48) a. Die Wolkendecke reißt auf.
- b. Der Blitz hat in das Haus eingeschlagen.
- c. Das Kind muss schiffen.
- d. Der Wind stürmt die ganze Nacht.
- e. Blut tröpfelt aus der Wunde.

これらの動詞は es 構文でも用いられるものの、多くの場合はここで見られるように自動詞構文 ([NP Nominativ V]) で使用されるものである。これらの動詞はその意味が天候現象としても把握できることにより es 構文で使用され、またそれがある程度慣用化したものと考えられる。すなわちここでは名詞句の主語を取る自動詞の非人称化が見られる。また数は少ないものの、その意味からして本来は他動詞構文で用いられる動詞が es 構文で用いられるものも見られる。

- (49) a. Sie gießt Wein ins Glas.
- b. Er schüttet Milch aus der Kanne.

²⁴ 通常は es 構文で用いられるこれらの動詞が比喩的に名詞句の主語を取る自動詞構文で用いられることもある。例えば *Die weiß-rosanen Blütenblätter schneien später romantisch zu Boden und über den Sommer und Herbst reifen die leckeren Äpfel heran* (<https://wissen.bloomify.de/wissen/pflanzen/apfelbaum-elstar/articles/hauptspalte-19>, 最終閲覧日 2026 年 9 月 3 日) では、リンゴの葉が地面に落ちる様子が動詞 *schneien* を用いて比喩的に表されている。

gießen や *schütten* といった動詞は通常は以上のように他動詞構文（特に使役移動構文）で用いられる。これらの動詞が *es* 構文で出現するのは、「こぼす」という意味が天候、具体的には降雨現象として比喩的に解釈される余地があるためであろう。意味的に整合するのであれば、このように通常他動詞構文で使われる動詞も *es* 構文と融合することがある。これは他動詞の非人称化と言える。自然現象の他のタイプもほぼすべて自動詞としての用法が通常であるものが多く、それが *es* 構文によって非人称化され、またそれが慣用化していると解釈可能である。²⁵ 以下はそれぞれのタイプの動詞が通常の名詞句の主語を取る自動詞として用いられている例である。

時間帯現象：

- (50) a. Die Straße dunkelt.
- b. Der Morgen/Abend dämmerte.
- c. Der Himmel ist hell/dunkel.

植物成長：

- (51) a. Die Mandelbäume blühen im März.
- b. Die Bäume grünen.

発酵：

- (52) Das Bier gärt.

通気：

- (53) Die Pfeife zieht.

発煙：

- (54) Der Vulkan raucht.

飛散：

- (55) a. Die Straße staubt.
- b. Das Wasser spritzte aus dem Schlauch.

沸騰：

- (56) Das Wasser kocht.

脱落：

- (57) Die Halterung rastet aus.

燃焼：

- (58) Das Feuer im Ofen brennt.

²⁵ ある動詞に関して *es* 構文と自動詞構文のどちらが本来的であるかは最終的に経験的なデータによって確認されることになる。またどちらが頻繁に用いられるかは通時的にも変遷が見られると考えられる。

超自然現象：

- (59) a. Der Geist des Schlossherrn spukt hier noch heute.
- b. Die Kinder geistern nachts durchs Haus.

気温現象：

- (60) a. Das Wasser friert bei Null Grad.
- b. Der Schnee ist an der Sonne getaut.

騒乱：²⁶

- (61) a. Die Suppe brodelt im Topf.
- b. Die Geschichte ist schon überall rundgegangen.

es 構文は Langenscheidt (2008) には掲載されていない他の自然現象にも生産的に用いられる。

- (62) Das ist längst nicht alles; es schimmelt in den Wohnungen, die Beleuchtung in den Fluren funktioniert nicht und die Haustüren schließen nicht. (Nordkurier, 03.03.2007)
- (63) Es rostet nicht, es schimmelt nicht, es ist abwaschbar. Plastik. Wasserfestes Spielzeug, Regenbekleidung und PVC-Boden sind praktisch. (Braunschweiger Zeitung, 29.03.2011)

以上ではカビの発生を表す *schimmeln*、錆の発生を表す *rosten* が es 構文で用いられ、自然現象としてのカビや錆の生起が表されている。さらに次の例では *fluten*, *perlen*, *schäumen* といった動詞が es 構文で用いられている。

- (64) Damals jedoch verkörperte er sozusagen die Pubertät der deutschen Klavierszene. Klavier als Brunftverhalten durch Technik, als Feuerwerk. Es flutet, es perlt, es schäumt. Dann scheint der Flügel zu zerplatzen wie eine Seifenblase. Aus und vorbei. (Die Zeit, 12.11.1993)

ここでは「流れ出して、玉の滴となり、泡立つ」という自然発生的な状況が描写されている。また通常は作動者を取る動詞であっても、自然発生的な状況としての解釈がコンテクスト的に可能であれば、次の *tanzen* の例のように、es 構文との共起が可能となる（また (47) の例も参照）。

²⁶ ここに属する動詞のうち、*krieseln* は *In der Partei kriselt es* のように基本的に es 構文でのみ用いられる。

- (65) BUTOH ODER: ES TANZT AUS MIR! Jeder kann es, auch wenn wir es nicht wissen (https://www.a-tempo.de/at_data/issues/202005/a-tempo.pdf, 最終閲覧日 2026 年 9 月 3 日)

以上から、自然現象の動詞クラス構文は非常に生産的に使用されていると言え、表される事象が自発的でコントロールできない自然現象としての見方を取りうる場合には *es* 構文が許容されると考えられる。²⁷

次に騒音のタイプを見てみたい。このタイプはすべての動詞が *es* 構文だけでなく自動詞構文でも用いられ、次の例のように音の出どころが主語となる自動詞構文での使用が広く見られる。

- (66) a. Der Steward gongt zum Abendessen.
b. Die Glocke läutet zu Mittag.
c. Die Straßenbahn rumpelt und quietscht.
d. Der Donner rumst.
e. Die leeren Milchkannen scheppern.
f. Er bumste mit dem Kopf gegen die Fensterscheibe.
g. Die Familie über uns polterte den ganzen Abend.

したがってこれらの騒音動詞の *es* 構文の使用も、*es* 構文の拡張的な使用として把握可能である。このように一般的に自動詞構文で使われる動詞が *es* 構文と融合することで、音の出どころを背景化し、音が出ている事態そのものを自然発生的な事態として前景化している。また通常は音を放出する主体としての作動者を取る動詞が、以下のように *es* 構文で用いられることもある。

- (67) Es pfeift im Ohr. An der Party war es zu laut, und heiser ist man danach auch, weil man ständig sein Gspänli anschreien musste, um sich mit ihm unterhalten zu können. An der «Silentparty» gibt es so etwas nicht. (St. Galler Tagblatt, 02.07.2010)

²⁷ ただし自然現象でも基本的に個体の一回の状態変化を表す動詞（例えば *sterben*, *verrotten*, *wachsen* 等）は *es* 構文で出現する例が見つかりにくい。このことから *es* 構文の動詞のスロットの制限として、継続相として解釈可能であるという条件が想定可能である。なおインターネット上の検索では、Robert Silverberg (1972): *Dying Inside* の翻訳タイトルとして、*Es stirbt in mir* が見られた。ここではコントロールできない内面的状況としての死が次第に進行していくさまが表わされており、死が継続的で段階的な変化と把握されることで *es* 構文での出現が可能になっていると考えられる。(64) の *fluten*, *perlen*, *schäumen* もこれらの動詞が完了の助動詞 *sein* を取ることから状態変化を表すと考えられるが、ここでは反復的な解釈により、継続性が作り出されている。

- (68) Es schreit jedesmal in mir, wenn ich wieder über dieses arme Geschöpf lese.
(Tages-Anzeiger, 23.06.2001)
- (69) Frühling Es singt in mir mit Vogelstimmen; Der Himmel blaut, Lüfte schwimmen,
Die Sonne glüht in meinem Blut. (Neue Kronen-Zeitung, 25.03.1998)

これらの例ではそれぞれ *pfeifen, schreien, singen* が *es* 構文で用いられ、また自分の中で音が自然発生的にコントロールできない形で生起していることを描写している。以上から騒音動詞に関しても、*es* 構文が拡張されて生産的に使用されていると考えることができる。

これに対し、出来事の成否を表す動詞クラス構文に関しては *nicht weit her sein, abwärts gehen, aufwärts gehen, aussehen, aus sein* といった表現に限られ、この動詞クラス構文からの拡張と考えられる例は特に見られなかった。また欠乏を表す動詞クラスに属するのも *fehlen, gebrechen, hapern, mangeln* といった表現に限られていた。したがってこれらのクラスはこういった動詞に限られ、生産的でないと言える。身体状態を表す動詞クラス構文も、*gehen, gut gehen, schlecht gehen* といった表現に限られているようである。このクラスの例と考えられるものは、わずかに次の例のみであった。

- (70) In dieser Saison steht er bei neun Toren in acht Einsätzen. Es läuft ihm gut. Bei Dinamo hat er gelernt, mit hohen Erwartungen umzugehen. (Tages-Anzeiger, 13.11.2020)

ここでは *laufen* がこのクラスと同様の統語構造で用いられているが、同様に移動を表す動詞である *rennen* や *fahren* に関しては、与格が現れて身体状態を表すような例が見られなかった。したがってこの動詞クラスも生産的でないと言える。

これに対し、*jucken* や *kribbeln* のような身体感覚を表す動詞クラスに関しては生産性が見られる。皮膚感覚を表す次の動詞はこれらの動詞と同様にいずれもこの動詞クラス構文の形式で用いられる。²⁸

- (71) Es kitzelt mich in der Nase.
(72) Es kratzt mich im Hals.
(73) Es pikt mich am Rücken.
(74) Es prickelt mir am ganzen Körper.

²⁸ 経験者として対格と与格のいずれが出現するかは動詞によって異なる。またこの動詞クラスに属する動詞はいずれも通常他動詞構文で感覚が生じる対象（身体部位）を主語に取ることができる。

また皮膚の痛みや痛み全般を表す動詞もこの動詞クラス構文の形式で用いられる。²⁹

(75) Es zieht mir am Rücken.

(76) Mir tut es im Hals weh.

これらはいずれも経験者として与格が出現している。さらに震えを表す動詞もこの動詞クラスの形式で用いられる。

(77) Das Fieberthermometer zeigt 36,9, Kopfschmerzen habe ich nicht, aber der Körper fühlt sich fiebrig, es schüttelt mich, ich setze mich auf den Boden mit dem Rücken an die Heizung. (Süddeutsche Zeitung, 26.03.2016)

ここでは動詞 *schütteln* が用いられ、経験者は対格で現れている。以上のように「痛み」「かゆみ」「震え」などの自然発生的でコントロールできない不快な感覚に関しては、こういった意味に適合する範囲で一定の生産性が認められる。

存在を表す動詞クラス構文に関しては、上で挙げた *geben*, *setzen* などの動詞以外には見られず、生産性は確認できない。例えば *bringen*, *legen*, *besitzen* といった動詞に、存在の意味を持つ *es* 構文を適応することはできない。³⁰

これに対して必要を表す動詞クラス構文については、辞書では *bedürfen* のみしか挙げられていなかったものの、[*es* V Genitiv (必要とされる対象)] という形式の拡張的使用が見られる。以下のように必要を表す動詞 *benötigen*, *brauchen*, *erfordern*, *verlangen* のすべてにおいて、コーパスでこの動詞クラス構文の形式的拡張が見られる。

(78) Es benötigt einer möglichst wissenschaftlichen Quelle für die These, dass „In der Zeit-geschichtsforschung (...) seine Thesen zu dessen Ursachen und Verlauf weitgehend abgelehnt“ werden. (Diskussion: Stefan Scheil Wikipedia, 2011)

²⁹ 痛みを表す動詞 *schmerzen* は *Die Wunde schmerzt sehr stark* のように痛む部位が主語名詞句となる自動詞構文で用いられるのが普通であるが、DeReKo では対格を伴う *es* 構文の例が 1 件見られた：

Es schmerzt mich am ganzen Körper. Die Rippen besonders. Am Kopf fühle ich Schwellungen. (Süddeutsche Zeitung, 06.05.1993)

³⁰ ただし *Es hat Ohrfeigen geregnet* のような一部の天候動詞の比喩的な拡張を *Es hat so viele Ohrfeigen gegeben wie Regen* のように解釈するなら、存在の動詞クラス構文 [*es* V Akkusativ (存在物)] が関わっているとも考えられる。この場合、*Ohrfeigen* に付与される対格は存在の動詞クラス構文の属性を引き継ぐものと言える。

- (79) „Pauschale Lösungen mögen da eher falsch sein, aber fest steht: Es braucht einer Veränderung, die die Situation vor Ort berücksichtigt.“ (Rhein-Zeitung, 27.04.2021)
- (80) Erstens, es erfordert einer gemeinsamen europapolitischen Antwort auf alle diese Herausforderungen, statt national fragmentierter Wirtschaftspolitik; (<https://www.spd-wirtschaftsforum.de/news/europapolitische-agenda-2030/>, 最終閲覧日 2026 年 9 月 3 日)
- (81) Die Aktivenkonferenz in ihrer Wirkung sendete erneut ein starkes Signal an die Region. Sie (sic!) knüpfte an den Erfolg im letzem Jahr an, übertraf ihn und spiegelte die Vielfalt und den Gestaltungswillen der Ostsachsen wider. Es verlangt einer Fortsetzung. (<https://backup2026.igmetall-ostsachsen.de/aktuelles/meldung/ministerpraesident-michael-kretschmer-erhaelt-resolution-auf-der-aktiven-konferenz-der-ig-metall>, 最終閲覧日 2026 年 9 月 3 日)

これらの動詞が属格目的語をとることは例えば Duden (2011) にはほぼ記載されていないが、³¹ 必要を表す動詞のもとで [es V Genitiv (必要とされる対象)] という形式が広く出現していることは、この動詞タイプ構文が母語話者の頭の中にたしかに存在し、意味的類似性に起因する形式的な類推によって生産的に拡張されていることを示唆している。

以上では es 構文の動詞クラス構文それぞれの生産性について見た。その結果、自然現象と騒音のクラスは非常に生産的であることが確認された。また身体感覚と必要性については、これらの意味領域内で生産的に構文が使用されていることが明らかとなった。

6. おわりに：まとめと展望

本稿では構文文法の観点から、非人称の es を [es 動詞句] という形式と独自の機能を有する es 構文と見なして分析を行った。まずどのような動詞が動詞のスロットに現れうるのかという問いに対し、辞書の非人称動詞の記載をもとに動詞スロットに入る動詞述語の分析を行った。その結果、自然現象、騒音、出来事の成否、欠乏、身体状態、身体感覚、存在、必要性という意味タイプの述語が現れることが明らかとなった。基本的にこれらの意味タイプの動詞が es 構文と整合し、逆にこれらの意味タイプに属さない動詞は es 構文での生起が難しくなると考えられる。またこれらの意味タイプはそれぞれ統語構造と密接に結びついており、その意味タイプと統語構造の結びつきを動詞クラス構文として分析

³¹ Duden (2011) には *brauchen* にのみ、「格式ばった古風な (geh. veraltend)」という注釈とともに属格の用法の記載がある。

した。動詞クラス構文は *es* 構文のより具体的な事例としての統語・意味的特徴を持つ構文単位として位置づけられる。

続いて *es* 構文がどの程度生産的に拡張されて使用されるかについて考察を行った。その結果、自然現象や騒音においては *es* 構文の生産的使用が見られ、またそれに加えて身体感覚と必要の意味タイプにおいてもある程度の生産性が見られたが、その他の意味タイプに関しては、*es* 構文が動詞述語とともに涵養的な表現を形成していると考えられるものであった。また特に生産的な自然現象と騒音のタイプに見て取れるように、*es* 構文は自然発生的でコントロールできないシーンとしての捉え方を付与する形式と見なすことが可能である。このような捉え方と整合するコンテキストが与えられるなら、本来作動者をとる動詞であっても、*es* 構文での使用が可能となる。これが可能なのは、*es* 構文が独立した構文単位として母語話者の頭の中に存在しているためと考えられる。

以上では辞書やコーパスのデータをもとに *es* 構文の特徴を明らかにしてきたが、本稿で扱わなかった対象について最後に簡単に触れておきたい。本稿では辞書の記述をもとに *es* 構文に出現する動詞述語の分析を行ったが、*es* 構文が出現する場合には、辞書では非人称動詞として挙げられていなかったものの、Weinrich (1993) が社会的地平として挙げていた (82a) のようなものや、Helbig/Buscha (1991) が挙げていた (82b) のようなものがある。

(82) a. Es ist immer recht nett in Warnemünde.

b. Es hat mir in Ungarn gefallen.

このような例をどのように扱うかは今後の課題である。³² さらに本稿の対象としなかったのは、次のようないわゆる中間構文である。

(83) a. Es lebt sich hier gut.

b. Es schläft sich in diesem Bett wunderbar.

c. Es sitzt sich auf diesem Stuhl sehr bequem.

中間構文でも統語的位置によらず *es* は常に現れるが、この構文は統語的にも再帰代名詞や様態形容詞を伴う独自の構造を有し、さらにこれまで扱った *es* 構文とは異なり、総称的な意味を持つことから、基本的には *es* 構文と独立した別の構文と考えることができる。今後はこの構文が *es* 構文とどのような関係にあるか、またなぜこの構文で *es* が義務的に生起するのか、さらにはこの構文と *sich lassen* による中間構文との相違はどのようなものかといった点を明らかにする

³² これらの例はどちらも場所句を取っており、またどちらもその場所句の特徴づけを行っており、場所句が必須と考えられる点で共通している。

必要がある。³³

参考文献

- Croft, William (2003): Lexical rules vs. constructions: a false dichotomy. In: Cuyckens, Hubert/ Thomas Berg/René Dirven/Klaus-Uwe Panther (Hrsg.): *Motivation in Language: Studies in honour of Günter Radden*, Amsterdam: John Benjamins, 49-68.
- Czicza, Dániel (2014): *Das es-Gesamtsystem im Neuhochdeutschen. Ein Beitrag zu Valenztheorie und Konstruktionsgrammatik*. Berlin: de Gruyter.
- Duden (2005): *Die Grammatik. Unentbehrlich für richtiges Deutsch*. Mannheim: Bibliographisches Institut & Brockhaus.
- Duden (2011): *Deutsches Universalwörterbuch. 7., überarbeitete und erweiterte Auflage*. Berlin: Dudenverlag.
- Goldberg, Adele E. (1995): *Constructions: A Construction Grammar Approach to Argument Structure*. Chicago: University of Chicago Press.
- Goldberg, Adele E. (2006): *Constructions at work: The Nature of Generalization in Language*. Oxford: Oxford University Press.
- Goldberg, Adele E. (2019): *Explain Me This: Creativity, Competition, and the Partial Productivity of Constructions*. Princeton, NJ: Princeton University Press.
- Helbig, Gerhard/Joachim Buscha (1991): *Deutsche Grammatik. Ein Handbuch für den Ausländerunterricht*. Berlin et al.: Langenscheidt/Verlag Enzyklopädie.
- Langenscheidt (2008): *Großwörterbuch Deutsch als Fremdsprache*. Berlin/München: Langenscheidt.
- Miyashita, Hiroyuki (2004): *Es* in der Subjektposition – Eine kognitiv-linguistische Erklärung. In: Herwig, R. (Hrsg.): *Sprache und die modernen Medien: Akten des 37. Linguistischen Kolloquiums 2002 in Jena*, Frankfurt: Peter Lang, 27-36.
- Miyashita, Hiroyuki (2014): German *es* – a Construction Grammar approach. In: *Yearbook of the German Cognitive Linguistics Association* 2, 10.1515/gcla-2014-0010.
- 宮下博幸 (2026): 「構文ファミリーとしての受動構文と文の容認性」『KG ゲルマニステイク』27/28/29号, 63-85.
- Ogawa, Akio (2002): Wie grenzen unpersönliche Konstruktionen an persönlichen an? Eine kontrastiv-typologische Studie. In: Die japanische Gesellschaft für Germanistik

³³ 構文文法においては、上位の構文から下位の構文への継承 (inheritance) が行われるとされる。この立場に立つなら、中間構文も *es* 構文の下位構文ということになる。中間構文と *sich lassen* による中間構文については宮下 (2026) 参照。そこでは中間構文が *es* 構文の継承の立場から論じられている。またここで課題として挙げた点に関しても、その説明の可能性が議論されている。

- (Hrsg.): *Grammatische Kategorien aus sprachhistorischer und typologischer Perspektive: Akten des 29. Linguisten-Seminars*, München: iudicium Verlag, 142-153.
- Ogawa, Akio (2012): Zur Typologie der Witterungs-, Klima- und daran angrenzenden Prädikate – unter besonderer Berücksichtigung des Deutschen und des Japanischen. In: Redder, Angelika/Akio Ogawa/Shinichi Kameyama (Hrsg.): *Unpersönliche Konstruktionen. Prädikatsformen funktional und sprachübergreifend betrachtet*, München: iudicium. 201-212.
- Weinrich, Harald (1993): *Textgrammatik der deutschen Sprache*. Baden-Baden: Olms.
- Ziem, Alexander / Alexander Lasch (2013): *Konstruktionsgrammatik: Konzepte und Grundlagen gebrauchsbasierter Ansätze*. Berlin: de Gruyter.

前域の *es* における *es* 挿入の動機と認可条件をめぐって：

生成文法による分析

伊藤 克将

1. はじめに

本稿では、いわゆる前域の *es* (Vorfeld-*es*) を取り上げる。前域の *es* はその名の通り前域にしか現れることができず、(1b, c)のように中域に現れると非文となる。また動詞の項ではなく、意味役割も持たない。さらに定動詞は意味上の主語と一致し、例えば(2a)では *einige Kinder* と、(2b)では *der Kanzler* と定動詞が一致している。そして(3)で示すように、前域の *es* は代名詞類や *man* と共起することが不可である。

- (1) a. **Es** wurde gestern getanzt.
b. Gestern wurde (***es**) getanzt.
c. ...dass (***es**) getanzt wurde.

(Mohr 2005: 35)

- (2) a. **Es haben** einige Kinder Spinat gegessen.
b. **Es hat** soeben der Kanzler die Bühne betreten.

(Mohr 2005: 140)

- (3) a. ***Es** ist **er** gestern gekommen.
b. ***Es** hat **man** hier viel getanzt.

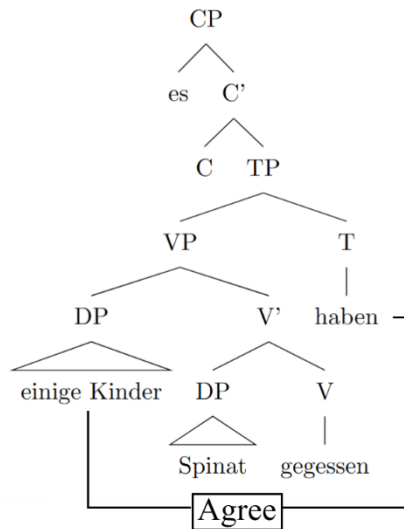
(吉田 1997: 74, 82)

生成文法の枠組みによる先行研究において、「前域の *es* の挿入は定動詞第二位の実現のためである」という点では概ね意見が一致しているが、実際の分析に関しては CP 指定部での基底生成説 (Tomaselli 1986, Bayer & Suchsland 1998, Mohr 2005, Ito 2023) と、TP 指定部からの移動説 (Cradinaletti 1990, Vikner 1995, 吉田 1997, Hinterhölzl 2024) の二つが存在する。このとき、分析が説明を与えるべき点としては、①なぜ(2)のように定動詞は前域の *es* ではなく意味上の主語と一致するのか、および、②なぜ(3)のように前域の *es* は代名詞類と共起不可なのか、の二つが挙げられる。

まずは、CP 指定部での基底生成説 (Tomaselli 1986, Bayer & Suchsland 1998, Mohr 2005, Ito 2023) において、①と②がどのように説明されるのか見てみよう。①なぜ定動詞は前域の *es* ではなく意味上の主語と一致するのか、だが、これは前域

の *es* が(4)のように CP 指定部に基底生成されるため、TP 内の一致操作に参入しないことが理由となる。¹

(4)



なお、(5)のように名詞句がない場合、定動詞は無標である 3 人称単数の形で実現するが、これは(6)のように[+speaker][+hearer][+plural]いずれの素性も持たない 3 人称単数の形が無標であるがゆえと考えることができる (vgl. Ito 2023)。

(5) = (1a) Es wurde gestern getanzt.

- (6)
- | | | | | | | |
|---------------------|------------|---|---|-----------|-----------|---|
| 1. Person Singular: | [+speaker] | [|] | [|] | |
| 1. Person Plural: | [+speaker] | [|] | [+plural] | | |
| 2. Person Singular: | | | | [+hearer] | [|] |
| 2. Person Plural: | | | | [+hearer] | [+plural] | |
| 3. Person Singular: | | | | | | |
| 3. Person Plural: | | | | | | |

(Ito 2023: 104)

続いて、②なぜ前域の *es* は代名詞類と共起不可なのか、についてであるが、これは CP 指定部での基底生成説では即座に説明を与えることは難しい。というのも、代名詞類は TP 領域に存在するため、CP 指定部にある前域の *es* との関わりが不明になってしまうからである。

それでは次に、TP 指定部からの移動説 (Cradinaletti 1990, Vikner 1995, 吉田

¹ 定動詞の一致操作は、TP 主要部により行われる。なお(4)における *haben* の T から C への主要部移動は、Chomsky (2000)にならい音韻上の効果とする。

1997, Hinterhölzl 2024) を見る。こちらを採用した場合、②なぜ前域の *es* は代名詞類と共起不可なのか、については説明を与えることが可能となる。前域の *es* は(7b)のように TP 指定部に基底生成された上で CP 指定部に移動するが、代名詞類は TP 指定部に置かれているため、(8)のようにそもそも前域の *es* が基底生成できないためである。

(7) a. Es wurde getanzt.

b. [CP [Spec-CP *es_i*] [[C wurde] [TP [Spec-TP *t_i*] [VP getanzt]]]]



(8) a. *Es ist er gestern gekommen.

b. [CP [Spec-CP] [[C ist] [TP [Spec-TP *er*] [VP gestern gekommen]]]]



↑
es の生成が不可

しかしながら、TP 指定部からの移動説では、①なぜ定動詞は前域の *es* ではなく意味上の主語と一致するのか、という問いに即座に説明を与えることは難しい。というのも、一致操作の起こる TP 領域に *es* を想定するため、*es* がなぜ一致操作に参加しないか不明になってしまうためである。

ここまでの議論をまとめよう。CP 指定部での基底生成説では、①（意味上の主語との一致）を説明できるが、②（代名詞類と共起不可であること）の説明は難しい。TP 指定部からの移動説では、②（代名詞類と共起不可であること）を説明できるが、①（意味上の主語との一致）の説明は難しい。このことを踏まえ本稿では前域の *es* について、より良い分析を提案することを目的とする。まず 2 節において、TP 指定部からの移動説による②の説明にはそもそも問題点があることを指摘する。続く 3 節および 4 節では CP 指定部での基底生成説を採用し①を説明しつつ、さらに②の説明を試みる。その際、3 節においては意味論・語用論による説明を、4 節においては統語論による説明を検討し、統語論による説明の方が優れていることを示す。5 節は本稿の結論である。

2. TP 指定部からの移動説による②の説明の問題点

TP 指定部からの移動説が、②（代名詞類と共起不可であること）に対して与える説明は、以下のようなものであった。すなわち、前域の *es* は TP 指定部に基底生成された上で CP 指定部に移動するが、代名詞類は TP 指定部に置かれているため、そもそも前域の *es* が基底生成できない、というものである。しかしながら、そもそも TP 指定部（中域の左端）には(9)のように複数の代名詞が存在す

ることが可能である。

(9) a. Wem hat der Lehrer das Buch gegeben? – Dem Schüler hat **er es** gegeben.

(幸田 1983: 59-60)

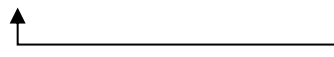
b. [_{CP} Dem Schüler hat [_{TP} **er es** [_{VP} gegeben]]]

よって、TP 指定部に代名詞が存在しているからと言って、前域の *es* がそれらに加えて TP 指定部に基底生成できない理由は見当たらない。たとえば前域の *es* を伴うことを意図した(10b)は代名詞 *er* の存在が原因で非文だが、(9b)が可能である以上、(10c)のような派生が可能であると誤って予測されてしまうのである。

(10) a. Er ist gestern gekommen.

b. *Es ist **er** gestern gekommen.

c. [_{CP} [_{Spec-CP} *es_i*] [[_C ist] [_{TP} [_{Spec-TP} *t_i* **er**] [_{VP} gestern gekommen]]]]



よって TP 指定部からの移動説は、①の説明が難しい上、②の説明に関しても問題があると言わざるを得ない。このことから、前域の *es* の分析にあたっては、TP 指定部からの移動説よりも CP 指定部での基底生成説を取った方がよいと思われる。

3. CP 指定部での基底生成説を採用した場合の②の説明：意味論・語用論による説明

さて、1 節において、CP 指定部での基底生成説を取った場合は「①なぜ定動詞は前域の *es* ではなく意味上の主語と一致するのか」に関しては説明が可能である一方、「②なぜ前域の *es* は代名詞類と共起不可なのか」に関しては説明が難しくなることを見た。そこで本節では、CP 指定部での基底生成説を維持しつつ②に対しても説明を与えることを目指し、意味論・語用論による分析を検討する。3.1 では情報構造によるアプローチを、3.2 では単独判断・複合判断によるアプローチを取り上げる。

3.1 情報構造によるアプローチ

まず、情報構造によるアプローチを検討する。Speyer (2009) によるコーパス調査では、前域の *es* を含む文 190 例において、主語はいずれも新情報であったことが報告されており、実例としては(11)のようなものが挙げられている。

(11) Nichts erinnert an dem Ort zwischen Friedrichshain und Kreuzberg, der Mitte des künftigen gemeinsamen Bezirks, an den Charme der griechischen Hauptstadt. **Es dominieren Industriebetriebe, verfallene Gebäude, Schutthalden, Sandberge.**

(Berliner Morgenpost 19.5.1998, S.11, „Von Spree-Athen noch weit entfernt“, zitiert nach Speyer 2009: 335)

Speyer (2009) はあくまで主語についてのみ述べているが、ここではさらに踏み込み以下の仮説を立てる。すなわち、「前域の *es* は、文のすべての要素が新情報であることを要求する構文である」という仮説である。この場合、(12)の非文性は正しく予測される。というのも、代名詞は前文脈に出てきた要素を指すので常に旧情報となるためである。

(12) = (3a) *Es ist **er** gestern gekommen.

しかしながらこの仮説では、なぜ(13)のように *man* との共起が不可なのかは説明できない。というのも、*man* は前文脈に出てきた要素を指すわけではないため、旧情報とは言えないためである。

(13) = (3b) *Es hat **man** hier viel getanzt.

さらに、代名詞類は *nur* と共に現れた場合は(14)のように前域の *es* と共起可能であり、これがなぜかについても説明が難しい。たとえ *nur du* 全体では新情報であると考えたとしても、*du* 自体はあくまで前文脈に出てきた要素を指す代名詞であり、旧情報と言わざるを得ないからである。

(14) Es kommst **nur du** in Frage.

(Zifonun 1995: 54)

よって、情報構造によるアプローチには問題があると言わざるを得ない。

3.2 単独判断・複合判断によるアプローチ

続いて、単独判断・複合判断によるアプローチを検討する。Marty (1918: 296) は単独判断の例として、以下のような前域の *es* を挙げている

(15) a. Es wird getanzt.

b. Es ritten drei Reiter.

(Marty 1918: 296)

また、Mohr (2005: 123) も前域の *es* は単独判断の文であると述べている。そこで、以下のような仮説を考える。すなわち、「前域の *es* は、単独判断の文を義務的に要求する」という仮説である。なお、何をもって「単独判断」「複合判断」とみなすかは諸説あるが (vgl. Kuroda 1972, Sasse 1987, Mori 1993)、本発表では藤縄 (編)(2022) に基づき、「存在承認」あるいは「存在棄却」を表す場合を単独判断、主語等の存在が承認された上で文の内容が判断される場合を「複合判断」とする。

さて、上記の仮説では、代名詞類を含む文は（すでに代名詞の指示対象の存在が承認されているので）複合判断であるため、前域の *es* とは共起不可であることが正しく予測される。また筒井 (2022: 50) によれば、*nur* は単独判断の読みを誘発するという²。この考え方を採用すると、(16)のように *nur* を伴った場合に代名詞類が前域の *es* と共起可能になることも正しく予測される。

(16) = (14) Es kommst **nur du** in Frage.

しかしながらこの仮説でも、なぜ *man* と前域の *es* が共起不可能なのかは説明できない。というのも、*man* を含む文はむしろ存在承認を意味する「単独判断」の文と考えられるためである。

(17) = (3b) *Es hat **man** hier viel getanzt.

よって、単独判断・複合判断によるアプローチも問題があると言わざるを得ないであろう。ここまでの議論をまとめると、「②なぜ前域の *es* は代名詞類と共起不可なのか」という問いに対して、情報構造や単独判断・複合判断といったものに立脚した意味論・語用論的な説明を与えることは難しいということになる。そこで次節では、統語的アプローチにより②の問いに答えを与えることを試みる。

4. 提案：統語的アプローチ

本節では、統語的アプローチによる分析を提案する。前域の *es* と共起不可で

² 筒井 (2022: 45) は、*nur* と *allein* を対比し、*nur* は焦点値以外の存在を前提としない一方、*allein* はそれが前提とされることを指摘した。これは焦点値の代替が必要とされない文脈（たとえば *Biologisch gibt es nur/*??allein die Blutgruppen A, B, AB und O.*）において *nur* と *allein* の容認度に差があることから支持される。この点などから筒井 (2022: 50) は、*nur* を含む文は焦点値の存在を承認する単独判断の文である一方、*allein* を含む文は焦点値以外の存在を前提とする複合判断の文であると結論付けている。ただし、前域の *es* は *allein* を伴う代名詞とも共起可能（^{ok}Es kommst **allein du** in Frage.）であるため、この点においても単独判断・複合判断によるアプローチは問題であると言えるだろう。

ある代名詞類および *man* は、中域の左端（いわゆる Wackernagel 位置）に置かれる類のものである。そこでこれらの代名詞に[+Wackernagel]という素性を想定し、ドイツ語のすべての統語的要素は[+Wackernagel]と[-Wackernagel]のいずれかに指定されていると考える³。なお Wackernagel 素性の存在は、代名詞類や *man* が義務的に TP 領域に移動することから支持される。(18)(19)で示すように、代名詞類や *man* などの[+Wackernagel]を持つ要素は T との一致操作（Agree-Operation, vgl. Chomsky 2000）により TP 領域に義務的に移動する一方、[-Wackernagel]の要素についてはその限りではない。

- (18) a. Peter hat **es mir** gestern gegeben.
 b. *Peter hat gestern **es mir** gegeben.
 b'. [CP Peter hat [TP **es mir** [VP gestern gegeben]]]

- (19) a. Das kann **man** überall kaufen.
 b. *Das kann überall **man** kaufen.
 b'. [CP Das kann [TP **man** [VP überall kaufen]]]

そして本稿では統語的アプローチとして、以下の仮説を提案する。すなわち、前域の *es* は、[-Wackernagel]素性との一致操作（Agree-Operation, vgl. Chomsky 2000）を必要とする、という仮説である。この仮説のもとでは、たとえば(20)のような一致関係が想定される。

- (20) **Es** dominieren Industriebetriebe, verfallene Gebäude, Schutthalden, Sandberge.

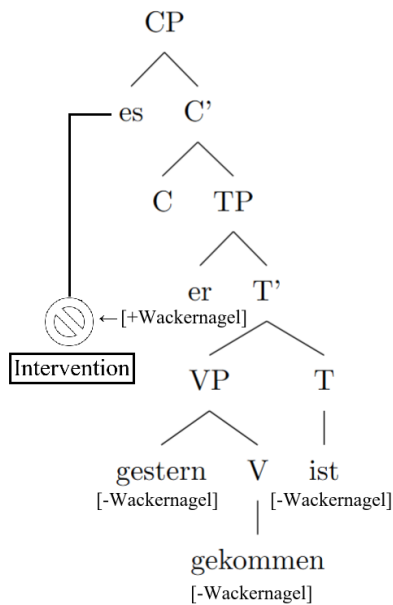


すると、代名詞類や *man* が前域の *es* との共起が不可であることが正しく予測される。というのも、代名詞類や *man* は[+Wackernagel]素性により TP 領域に移動しているため、前域の *es* と[-Wackernagel]素性を持つ句との一致操作に、介在効果（Interventionseffekt, vgl. Rizzi 2004）を[+Wackernagel]素性がもたらしてしまい、非文となるためである。たとえば(21a)のような文は、(21b)のように分析される。

- (21) a. *Es ist **er** gestern gekommen.

³ なお[-Wackernagel]は「Wackernagel 素性が存在しない」という意味ではなく、[+Wackernagel]とは別の独立した素性であるとする。

b.



ここでは、代名詞 *er* のもつ [+Wackernagel] 素性が介在効果をもたらし、前域の *es* と [-Wackernagel] 素性を持つ句との一致操作が阻害されることで統語派生が破綻し、文が非文となっている。なお、*ist* の T から C への主要部移動は Chomsky (2000) にならい、音韻上の効果とする。

また *man* についても、先述の通り (22) のように中域の左端への移動が義務的なため、[+Wackernagel] 素性を持つと考えられる。すると代名詞と同様に介在要素となるため、(23) のように前域の *es* と共起不可であることが正しく予測される。

(22) = (19) a. Das kann **man** überall kaufen.

b. *Das kann überall **man** kaufen.

(23) = (3b) *Es hat **man** hier viel getanzt.

さらに (24) のように、*nur* を伴う代名詞類はそれを伴わない (かつ強勢の置かれていない) 代名詞とは異なり、中域の左端への移動が義務的ではない。よって *nur* を伴う代名詞類は [+Wackernagel] 素性ではなく [-Wackernagel] 素性を持つと考えられるため、前域の *es* との一致操作が可能であり (25) のように非文をもたらさないことが正しく予測される。

(24) a. Das glaubst aber auch **nur du**!

(COSMAS II, NKU09/JUL.01928 Nordkurier, 04.07.2009;

Warum Frieda so wütend ist)

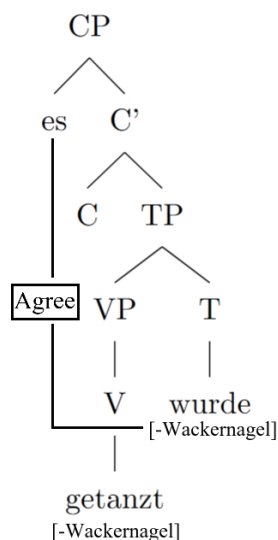
b. *Das glaubst aber auch **du**!

(25) = (14) Es kommst **nur du** in Frage.

またこの分析は、(26a)のような名詞句が存在しない非人称受動の文も捉えることができる。というのも、(26b)のように *wurde* が[-Wackernagel 素性]を持っているので、問題なく前域の *es* が認可されるためである。なお *wurde* の T から C への主要部移動についても、Chomsky (2000)にならい音韻上の効果とする。

(26) a. Es wurde getanzt.

b.



以上、本節で提案された統語的アプローチにより、②なぜ前域の *es* は代名詞類と共起不可なのか、という問いに答えが与えられた。すなわち、代名詞類や *man* の[+Wackernagel]素性が介在効果をもたらしてしまうためであり、これにより前域の *es* を含む文の統語派生が収束せず非文になってしまうためである。

5. おわりに

本稿では前域の *es* をめぐる疑問点として、①なぜ定動詞は前域の *es* ではなく意味上の主語と一致するのか、②なぜ前域の *es* は代名詞類と共起不可なのか、という二つを取り上げた。本稿の分析が正しければ、①に対する答えとしては、前域の *es* は CP 指定部に基底生成され TP 領域での人称に関わる一致操作に参入しないため、ということになり、②に対する答えとしては、代名詞類や *man* の[+Wackernagel]素性が介在効果をもたらす前域の *es* の[-Wackernagel]素性との一致操作が不可能になってしまうため、ということになる。

さて最後に、本叢書の全体テーマとの関わりを述べて稿を閉じることとしたい。ここで問題にしたいのは、「前域の *es* の生起条件は、機能によるのか、構造

によるのか」という問いである。まず留意する必要があるのは、前域の *es* の容認度には意味的要因も関わるという点である。Mohr (2005: 142) によると、(27) の文は容認度が低い、「目の見えない友人に舞台上で起きていることを解説する」ような文脈だと容認されるという。

(27) *?Es hat soeben der Mann die Bühne betreten.

(Mohr 2005: 142)

(27)の容認度が低い理由は、*der Mann* が旧情報として解釈されやすいためと考えられる。しかし「目の見えない友人に舞台上で起きていることを解説する」文脈では、*der Mann* は新情報として解釈されるため、文が容認可能となるのである。このことを鑑みると、前域の *es* が、文の要素の全てが新情報である（あるいは単独判断である）ことを伝える機能をもつ構文であることは間違いない。前域の *es* の機能的な側面は確かに存在するのである。とは言え、代名詞類は文脈を調整しても前域の *es* との共起は難しく、また *man* については上記の機能とはむしろ相性が良いにもかかわらず容認されない。このことから少なくとも前域の *es* については、構造に重きを置く統語的アプローチの方が適していると思われる。つまり「前域の *es* は、Wackernagel 位置に置かれるような要素を含まない構造を要求する」と考えたほうが、より統一的な説明が可能であり、機能よりも構造に根差した分析の方が優れていると言えるのである。

謝辞

本稿は、日本独文学会 2025 年秋季研究発表会において行われたシンポジウム「*es* が指し示す地平：いつ、なぜ *es* が現れるのか」における口頭発表に基づいている。貴重なコメントをくださった参加者の皆様に深く感謝したい。特に、藤縄康弘氏ならびに藤井俊吾氏とのシンポジウム内外における議論は非常に有益であった。なお本研究は、JSPS 科研費（課題番号：JP24K16063）による助成を受けている。

参考文献

- 幸田薫.(1983). 「テーマ・レーマ構造と文頭の語順」、『静岡大学教養部研究報告 人文・社会科学篇』第 19 巻 1 号、55–75.
- 筒井友弥.(2022). 「複合判断の表出に見る度量詞 *allein* の機能再考」、藤縄康弘（編）『複合判断・単独判断とドイツ語文法一定性を軸にー（日本独文学会研究叢書 150 号）』、37–52. 日本独文学会.
- 藤縄康弘（編）.(2022). 『複合判断・単独判断とドイツ語文法一定性を軸にー（日本独文学会研究叢書 150 号）』、日本独文学会.

- 吉田光演 (1997). 「ドイツ語の虚辞 *es* の統語論」、『言語文化研究』第 23 巻、73–89.
- Bayer, J., & Suchsland, P. (1998). Some remarks on expletives in German. *KOPS-Das Institutionelle Repositorium der Universität Konstanz*. URL: <http://nbn-resolving.de/urn:nbn:de:bsz:352-opus-62902>.
- Cardinaletti, A. (1990). *Es*, pro and sentential arguments in German. *Linguistische Berichte*, 126, 135–164.
- Chomsky, N. (2000). Minimalist Inquiries. In R. Martin, D. Michaels, J. Uriagereka, & S. J. Keyser (Hgg.), *Step by step: Essays on minimalist syntax in honor of Howard Lasnik* (S. 89–156). Cambridge, Massachusetts: MIT Press.
- Hinterhölzl, R. (2024). Giving content to expletive *es* in German. *Journal of Comparative Germanic Linguistics*, 27(2), 1–31.
- Ito, K. (2023). Zur Syntax vom Vorfeld-*es* im Deutschen: Eine Labeling-basierte Analyse. *Linguisten-Seminar: Forum japanisch-germanistischer Sprachforschung*, 5, 93–107.
- Kuroda, S.-Y. (1972). The categorical and the thetic judgment. Evidence from Japanese Syntax. *Foundations of Language*, 9, 153–185.
- Marty, A. (1918). *Anton Marty Gesammelte Schriften, II. Band, 1. Abteilung, Schriften zur Deskriptiven Psychologie und Sprachphilosophie*. Halle a. S.: Niemeyer.
- Mohr, S. (2005). *Clausal Architecture and Subject Positions*. Amsterdam: John Benjamins.
- Mori, Y. (1993). Kuroda Shigeyuki: Japanese syntax and semantics. *Asie orientale*, 22(1), 133–139.
- Rizzi, L. (2004). Locality and left periphery. In A. Belletti (Hgg.), *Structures and Beyond* (S. 223–251). Oxford: Oxford University Press.
- Sasse, H.-J. (1987). The thetic/categorical distinction revisited. *Linguistics*, 25, 511–580.
- Speyer, A. (2009). Das Vorfeldranking und das Vorfeld-*es*. *Linguistische Berichte*, 219, 323–353.
- Tomaselli, A. (1986). Das unpersönliche „*es*“: Eine Analyse im Rahmen der generativen Grammatik. *Linguistische Berichte*, 102, 171–190.
- Vikner, S. (1995). *Verb Movement and Expletive Subjects in the Germanic Languages*. Oxford: Oxford University Press.
- Zifonun, G. (1995). Minimalia Grammaticalia: Das nicht-phorische *es* als Prüfstein grammatischer Theoriebildung. *Deutsche Sprache*, 23, 39–60.

主語としての相関詞 es の出現傾向：

主語文が後続する形容詞述語の実例調査から¹

井坂 ゆかり

1. はじめに

本研究では、現代ドイツ語において、形容詞述語とともに母文に現れ、主語文と相関する es (英：it) を研究対象とする。これを、本論文では「主語としての相関詞 es」と呼ぶ。

主語としての相関詞 es の例として、(1a,b)を挙げる。(1a,b)では、es は後続の dass 文 (英：that 節) と相関して母文に現れている。

- (1) a. Heute ist es bekannt, dass er kommt.
today is it known that he comes²
b. Heute ist es angenehm, dass er kommt.
today is it pleasant that he comes
c. Heute ist bekannt, dass er kommt.
d.*Heute ist angenehm, dass er kommt.

Pütz (1991: 297)

es の出現・非出現には、母文の述語の影響が指摘されている。(1c,d)のように、中域における es の出現の義務性は、母文の述語の形容詞によって異なると言われている。Pütz (1991)によれば、形容詞 *bekannt* では es が任意に出現するが、形容詞 *angenehm* では es が義務的に出現しなければならない。

一方、Paranhos Zitterbart (2002)は、es の出現は基本的にどの形容詞でも任意との見方を示している。その上で、es は既出内容への言及のシグナルで、新情報を導入する際には es を用いないという語用論的な観点を重視して分析している。

es が任意に出現する形容詞と義務的に出現する形容詞とを区分しようとする Pütz (1991)と、基本的にどの形容詞でも任意に出現するとする Paranhos Zitterbart (2002)の主張は、一見、対立するものに思われる。主語としての相関詞 es は、形

¹ 本研究は、JSPS 科研費 JP25K16261 の助成を受けています。また、本研究は、2025 年 10 月 18 日日本独文学会秋季研究発表会シンポジウム「es が指し示す地平：いつ、なぜ es が現れるのか」で行った発表に基づいています。発表当日のフロアの皆様、および、シンポジウムのメンバーの皆様に、この場をお借りして感謝申し上げます。

² 強調表示や対応する英語は本研究の筆者による追記である。以下、引用した例文に付した強調と英語についても同様。ただし、(2)の強調と英語は吉田(1997)による。

容詞述語ごとに出現したりしなかったりするのだろうか。

本研究では、主語としての相関詞 *es* の特徴を整理したうえで、ドイツ語研究所 IDS (Leibniz-Institut für Deutsche Sprache) のタグ付きコーパスを用いて実例を調査し、形容詞述語と *es* の出現・非出現の概観を捉えることを目的とする。

2. 相関詞 *es* と前域の *es*

主語としての相関詞 *es* の調査に取り組むためには、まず、*es* の複数の用法を区別しなければならない。

代名詞 *es* を広範にわたって分析した Pütz (1975) は、「1. 文頭以外におくことができる、2. 文頭にも文頭以外にもおくことができる、3. 主文／副文の置換の関係で消える、4. 性／数の一致がある、5. *das* で置き換え可能（拙訳）」に該当するかしないかにより、*es* の 9 つの用法の弁別的特徴を論じている (Pütz 1975: 40)。上記の 5 つのフィルターにより、用例が順番にふるいにかけられ分類されていく仕組みである (Pütz 1975: 33)。1 つ目のフィルター「文頭以外におくことができる」を通過する *es* は、分類にあたってさらなるフィルターが必要になるが、このフィルターによって選別される、すなわち、文頭以外にはおくことができない *es* は、グループ 1 としてまとめることができる。本研究では、この文頭以外にはおくことができない、つまり、前域のみにしか現れない *es* を、「前域の *es*」と呼称する。前域の *es* は、相関詞 *es* とは異なり、後続する節と相関関係がなく、定動詞第 2 位の文構造を守るために前域を埋めているにすぎない。そのため、「虚辞 (expletive) の *es*」と呼ばれることもある。(2a) は虚辞の *es*、本研究でいう前域の *es* にあたり、(2b) は主語としての相関詞 *es* にあたる³。

(2) a. *Es* kommen Tiere aus dem Dschungel.

there come animals out of the jungle

動物たちがジャングルから出てくる。⁴

虚辞 (expletive) の *es*

b. *Es* ist gut, dass er gekommen ist.

it is good that he come has

彼が来たのは良いことである。

外置された節と相関する *es*

吉田 (1997:73)

³ ただし、文頭に位置する *es* の曖昧性については後述する。

⁴ 例文の強調表示と英語、用法説明は吉田(1997)による。和訳は本研究の筆者による追記である。以下、引用した例文に付した和訳についても同様。

1つ目のフィルター「文頭以外におくことができる」に加え、2つ目のフィルター「文頭にも文頭以外にもおくことができる」および3つ目のフィルター「主文／副文の置換の関係で消える」にあてはまる *es* は、グループ 2 に分類される。この *es* が、主語としての相関詞 *es* である。例文で確認すると、主語としての相関詞 *es* は、上記(1a, b)のように文頭以外に現れることも、(2b)のように文頭に現れることもある。また、現れるのは補文が後続する場合にのみ可能であり、補文が前置される場合、下記(3b,c)が示すように、母文に出現することはできない。

(3) a. *Es* wundert manchen, dass der Franz den Josef so bewundert.

it surprises some that the Franz the Josef much admires

b. *Dass der Franz den Josef so bewundert, wundert *es* manchen.

c. Dass der Franz den Josef so bewundert, wundert manchen.

Pütz (1975: 18)

本研究では、以上の特徴を持つ主語としての相関詞 *es* が、形容詞述語とともに用いられるケースについて調査を行う。

ここで、主語としての相関詞 *es* と前域の *es* の区別について改めて整理する。上記例文(1a,b)のように、*es* が文の中域に位置し、かつ、相関関係にある後続の節の存在が確認できれば、それは相関詞の *es* と考えられる。前域の *es* は名前の通り、前域にしか出現しないためである。一方、(4a)のように、*es* が前域に位置し、相関関係にありそうな後続の節が存在する場合はどうだろうか。

(4) a. *Es* ist heute bekannt, dass er kommt.

it is today known that he comes

b. Heute ist *es* bekannt, dass er kommt.

c. Heute ist bekannt, dass er kommt.

時を表す副詞 *heute* に注目すると、(4a)では *heute* は文の中域に留まっているが、(4b)と(4c)では前域を占めている。定動詞第2位の原則のため、(4a)の前域も空のままにすることはできない。(4a)では、(4b)で文の中域に位置している相関詞の *es* が代わって前域を埋めているとも考えられる。一方、そもそも(4c)のように相関詞 *es* がない構造も可能であり、(4a)の文頭の *es* は穴埋めのための前域の *es* である可能性も考えられる。結局のところ、(4a)のように前域に位置する *es* は、相関詞の *es* か前域の *es* か断定することはできない。この文頭の *es* の曖昧性については、先行研究でも指摘されている (cf. Paranhos Zitterbart 2002: 152-154)。

以上、前域に位置する *es* は相関詞 *es* であるとは言い切れなため、調査にあたっては中域に位置する *es* に着目する必要がある。

3. 主語としての相関詞 *es* の出現・非出現

続いて、本節では 1 節でも触れた先行研究の検討に移る。例文(1)を再掲する。

再掲(1) a. Heute ist *es* bekannt, dass er kommt.

today is it known that he comes

b. Heute ist *es* angenehm, dass er kommt.

today is it pleasant that he comes

c. Heute ist bekannt, dass er kommt.

d. *Heute ist angenehm, dass er kommt.

Pütz (1991: 297)

Pütz (1991)は、上記の形容詞の差異について、*bekannt* のように *es* が任意に出現する形容詞は主語文に *zu* 不定詞句 (英: *to* 不定詞句) を許さず、対して、*angenehm* のように *es* が義務的に出現する形容詞は主語文に *zu* 不定詞句をとりうると説明している。

一方 Paranhos Zitterbart (2002)は、*möglich* (英: *possible*) を除き、形容詞においては、(5)のように *angenehm* も含め相関詞 *es* の出現が任意であると考えている。相関詞の出現と非出現は、焦点・背景に基づいて決定され、*es* は旧情報のマーカーとして働くという。逆に、*es* が出現しないのであれば、新情報が導入されていると考えられるという。

(5) a. Für uns ist *es* sehr angenehm, dass wir das Geld bekommen.

for us is it very pleasant that we the money get

b. Für uns ist sehr angenehm, dass wir das Geld bekommen.

c. Sehr angenehm ist *es* für uns, dass wir das Geld bekommen.

d. Sehr angenehm ist für uns, dass wir das Geld bekommen.

Paranhos Zitterbart (2002: 178)

angenehm を相関詞 *es* の出現が義務的な形容詞と捉える Pütz (1991)と、*angenehm* を含め形容詞は基本的に *es* の出現が任意であると考える Paranhos Zitterbart (2002)の主張には、食い違いがあるように見える。しかし、実は、Pütz (1991)は義務的な出現を絶対的なものと考えているわけではない。与格を伴う場合は(6)のように容認性に揺れが生じるという (Pütz 1991: 299-300)。

(6)? Mir ist angenehm, dass er kommt.

me is pleasant that he comes

また、(7)のように形容詞が前域にあり、情報構造の観点から対比のイントネーションが用いられる場合、es が義務的に出現するはずの *angenehm* でも、出現が任意になるという (Pütz 1991: 300-302)。

(7) An／genehm ist (es), dass er ko\mmt.

(5)と(6)(7)を比較すると、両者の指摘する事実は共通しているように思われる。つまり、Pütz (1991)のいう es が義務的に出現する形容詞とは、es がなければ非文法的な形容詞ではない。特段の条件がない限り、通常 es を伴う形容詞を意味していると考えられる。(6)(7)のように es が出てこない場合もあることをふまれば、Paranhos Zitterbart (2002)の主張のように、es の出現はどの形容詞でも任意であるとまとめることができる。

では、相関詞の出現に厳密な意味での義務性はないとして、形容詞述語とともに出現する相関詞 es の出現の任意性は、一律に捉えることができるのだろうか。

動詞とともに母文に現れる目的語としての相関詞 es に目を向けてみると、その出現・非出現は、母文の動詞によって傾向が異なると考えられている。相関詞の実例を動詞ごとに調査した Ulvestad/Bergenholtz (1983)は、es を伴わない動詞から常に es を伴う動詞まで、出現率に従い動詞が連続的なスケールを成すことを指摘している。つまり、相関詞が義務的な動詞と任意である動詞との線引きは難しいことになる。Axel-Tober et al. (2016)の es の出現率のコーパス調査の結果を一部抜粋すると、dass 文が後続する際、動詞 *bedauern* (英: regret) では 10%、*begrüßen* (英: welcome) では約 30%、*aufgeben* (英: give up) では約 50%、*hassen* (英: hate) では 80%以上、*überlassen* (英: leave to) では 90%と、任意の es の出現の中で出現率に差が見られる。

主語としての相関詞 es についても、実際の言語使用上、形容詞述語によりどのような傾向がみられるのか、実態を把握することは重要であると考えられる。

4. 調査方法

本研究では、形容詞述語ごとに相関詞 es の出現率に差があるかを調査するため、IDS のタグ付きコーパス TAGGED-T-öffentlich (新聞記事等)を用いて事例を収集する。その際、2 節で確認したように、前域の es との曖昧性を排除するため、中域に絞って事例を分析する。

中域の es を分析対象とするので、前域に es がある事例は対象外とし、前域が es 以外の要素で埋まっている事例のみを扱う。前域の要素は、その多様な可能性を損なわないよう、事前には指定しない。例えば(8)(9)は、与格の人称代名詞 *ihm* (英: him) が前域にあり、相関詞 es を伴う事例と伴わない事例である。

(8) Ihm ist es **wichtig**, dass diese Freundschaft weiter gefördert und ausgebaut wird.

彼にとって、この友情が引き続き育まれ、強められることは重要である。

(RHZ07/MAL.20067 Rhein-Zeitung, 21.05.2007; Partner feierten in Laubenheim)

(9) Ihm ist **wichtig**, dass das Verbot von allen befolgt wird.

彼にとって、禁止の命令が全員によって守られることは重要である。

(NON08/NOV.03259 Niederösterreichische Nachrichten, 05.11.2008, S. 2; Absolutes Verbot kaum umsetzbar)

ほかにも、heute をはじめとする時を表す副詞、In der Tat (英: indeed) や Allerdings (英: however) といった接続要素のほか、Wenn 文 (英: if 節) や Weil 文 (英: because 節) など、様々な可能性が考えられる。前域を指定しないことにより検索時に含まれてしまう対象外の例については、手作業で取り除くこととする。

es の出現率の調査を行うにあたり、まず、調査対象とする形容詞述語を選ばなければならない。IDS サイト上の検索システム COSMAS II で上述のタグ付きコーパスを選択し、「ist es 形容詞」(英: is it 形容詞) のように、文の第 2 位を占める直説法現在形の定動詞 ist に es および形容詞が続き、かつ、同一文内に従属節または zu 不定詞句が含まれる事例を検索、収集した (…①)。続いて、「ist 形容詞」のように、定動詞 ist に形容詞が続き、かつ、同一文内に従属節または zu 不定詞句が含まれる事例を検索、収集した (…②)。表計算ソフトで①と②の合計ヒット数の多い形容詞述語上位 20 個を検索し、(10)のとおり選出した⁵。

(10)

- | | | |
|---------------------------|------------------------------|----------------------------|
| 1. wichtig (英: important) | 9. schade (英: regrettable) | 16. fraglich (英: doubtful) |
| 2. klar (英: clear) | 10. notwendig | 17. erstaunlich |
| 3. gut (英: good) | (英: required) | (英: surprising) |
| 4. möglich (英: possible) | 11. besser (英: better) | 18. nötig (英: necessary) |
| 5. schön (英: nice) | 12. schwierig (英: difficult) | 19. sinnvoll |
| 6. bekannt (英: known) | 13. unklar (英: unclear) | (英: meaningful) |
| 7. schwer (英: heavy) | 14. egal (英: equal) | 20. erfreulich |
| 8. richtig (英: right) | 15. toll (英: great) | (英: enjoyable) |

(10)の 20 個の形容詞について、es の出現率を調査する。具体的には、erfreulich であれば、まず、「ist es erfreulich」に続き同一文内に従属節または zu 不定詞句が含まれる事例を COSMAS II で検索、収集した (…①')。収集した 115 件のう

⁵ ドイツ語では形容詞が同形で副詞的にも用いられるため、分析対象外の事例の多い形容詞 wirklich (英: really) や sicher (英: surely) などは除外し、他の形容詞の順位を繰り上げた。

ち、5 件は重複、1 件は前域が空だったため除外した。結果、(11)のような es を伴う事例は 109 件であった。

(11) Natürlich ist es **erfreulich**, dass viele Unternehmen eine Besserung nicht mehr nur erwarten, sondern auch tatsächlich registrieren.

無論、多くの企業がもはや（景気）改善を期待するのみならず、実際に確認していることは喜ばしい。

(HAZ09/JUL.08410 Hannoversche Allgemeine, 25.07.2009; Langer Weg)

続いて、「ist erfreulich」に続き同一文内に従属節または zu 不定詞句が含まれる事例を検索、収集した（…②'）。収集した 526 件には、前域に es が出現していたり、前域に主語となる代名詞や名詞句があったりと、今回の調査対象外のケースが数多く含まれていた。例えば、(12)では、文頭の名詞句 das Ergebnis が主語であり、後続の dass 文は動詞 aufzeigen（英：show）の目的語にあたる。

(12) Das Ergebnis ist **erfreulich** und zeigt klar auf, dass [...]

結果は喜ばしいもので、（中略）ということを明確に示している。

(SOZ07/JUN.05104 Die Südostschweiz, 25.06.2007; «HSR-Projekt übergeht die Bevölkerung»)

調査対象外の例を取り除くと、(13)のような es を伴わない事例は 25 件であった。

(13) „Vor allem ist **erfreulich**, dass drei Lehrlinge bei uns weiter lernen können“, unterstreicht Gaus mit stolzer Stimme.

(BRZ07/JAN.14202 Braunschweiger Zeitung, 26.01.2007; Neustart nach der Pleite)

「とりわけ、3 人の見習いが私たちのもとで引き続き学ぶことができるのは喜ばしいです」と Gaus 氏は誇らしげに強調する。

以上で、形容詞述語 erfreulich と共に相関詞 es が中域に出現している事例 109 件と、相関詞 es が中域に出現していない事例 25 件とが対照的に取り出されたことになる。最後に、両者を合計し（134 件）、es を伴う事例が何パーセントを占めているかを計算した（134 件中 109 件で、出現率は約 81%）。他の形容詞についても同様の作業を行った（論文末に付した表を参照）。

5. 調査結果

今回の調査における es の出現率（小数点以下四捨五入）を(14)に示す。

(14)

- | | | |
|------------------|---------------------|-----------------------|
| 1. wichtig (78%) | 9. schade (99%) | 16. fraglich (38%) |
| 2. klar (9%) | 10. notwendig (99%) | 17. erstaunlich (80%) |
| 3. gut (99%) | 11. besser (100%) | 18. nötig (99%) |
| 4. möglich (99%) | 12. schwierig (98%) | 19. sinnvoll (100%) |
| 5. schön (100%) | 13. unklar (1%) | 20. erfreulich (81%) |
| 6. bekannt (1%) | 14. egal (87%) | |
| 7. schwer (89%) | 15. toll (100%) | |
| 8. richtig (90%) | | |

傾向が把握しやすいよう、(14)の出現率に従い形容詞を並び替えると図1となる。

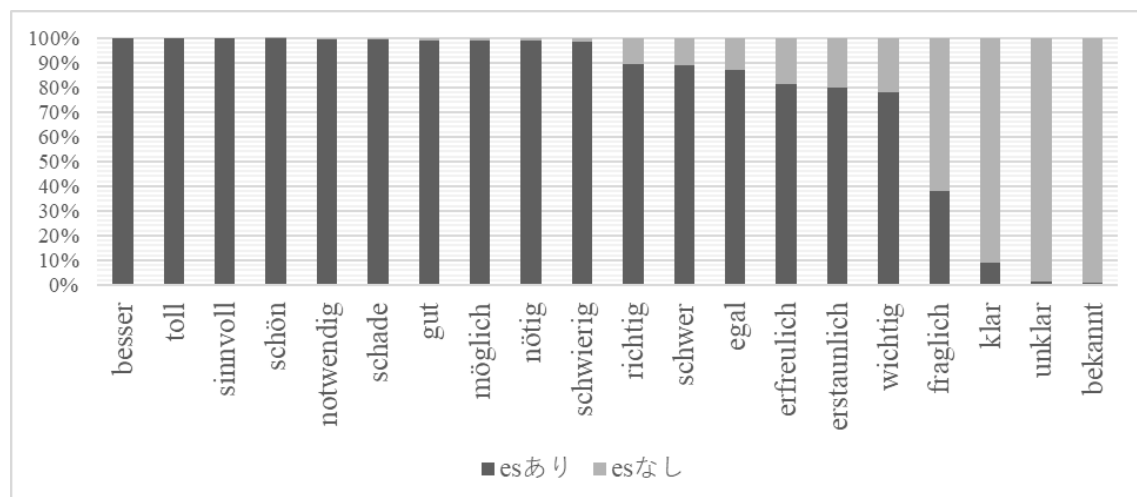


図1：各形容詞の中域の es の出現率

調査の結果、図1からわかるように、形容詞によって es の出現・非出現の傾向が認められた。besser から wichtig までは es の出現率が約 8 割またはそれを上回っているが、fraglich から bekannt までは逆に es が出現しない事例の割合が高い。

繰り返しにはなるが、本研究は、相関詞の出現が義務的な形容詞と任意である形容詞とを区分する基準を提示するものではない。3 節で確認したように、相関詞 es の出現は基本的に任意であると考え⁶。

⁶ 小数点以下を四捨五入した出現率が 100%の形容詞のうち、今回の調査では schön については es のない事例がわずかながら見つかったが、besser, toll, sinnvoll については es のない事例は見つからなかった。しかし、これらの形容詞についても、より規模の大きいコーパスの調査であれば、es のない事例が見つかる可能性があると考え。

6. 考察

調査結果より、相関詞 *es* が中域に出現しづらい形容詞は、*bekannt*, *unklar*, *klar*, *fraglich* であるが、これらは知識関連の形容詞といえる。本節では、知識関連の形容詞で *es* が出現しづらい理由を考察する。

知識関連の形容詞は、命題を表す *dass* 文や、命題の真偽がオープンである *ob* 文等を主語文とし、文脈上新たな情報を導入する際にしばしば用いられる。例えば、下記(15)は今回の事例調査で収集した事例のひとつであるが、海底からのメタンガスの大部分が大気中に放出される前に分解される過程について説明した文章の一部である。

(15) [...] Es gibt Befunde, wonach dieser Prozess von zwei in Symbiose lebenden Mikroorganismen gesteuert wird. Schon länger ist **bekannt**, dass in der Zone der Methanoxidation kein Sauerstoff vorhanden ist und für die Mikroorganismen nur das im Meerwasser enthaltene Sulfat als Oxidationsmittel zur Verfügung steht. Das Sulfat wird dabei zu Schwefelwasserstoff reduziert. Schwefelwasserstoff ist für höhere Lebewesen zwar sehr giftig, [...]

(前略) この過程が共生関係にある 2 種類の微生物によって制御されているという調査結果がある。メタン酸化ゾーンには酸素がなく、微生物にとって唯一海水に含まれる硫酸塩が酸化剤として利用可能であることが、既に長い間知られている。硫酸塩はその際、硫化水素に還元される。硫化水素は高等生物にとって非常に有毒である。(後略)

(SPK/J03.01632 spektrumdirekt, 17.12.2003; Kein Treibhausgas aus dem Meeresboden)

(15)では、まず、過程に関わる微生物の存在が導入された後、*bekannt* に後続する *dass* 文で、その微生物が過程で利用する物質、硫酸塩についての新たな情報が述べられている。続いて、その物質が還元されると有毒物質になる、と物質の性質についてさらに新たな情報が提示される。この文脈では、従属節の *dass* 文も一連の読者への新しい情報の提供に貢献しており、形容詞 *bekannt* により *dass* 文の内容を「周知の事実」と伝えることが主眼ではない。

Hooper/Thompson (1973: 480)によると、知識状態に関わる英語の動詞 *realize*, *learn*, *discover*, *know*, *see* 等では、補文命題が真であることが前提であるが、事実にある述語とは異なり、補文命題が主張の対象となる場合も考えられるという。それに応じ、(16a,c)のように、主節現象と考えられる補文前置や付加疑問文が可能である。これは、(16b,d)のように補文命題が前提の事実にある述語 *regret* や *be sorry* では不可能である。

- (16) a. Santa has lost a lot of weight, I notice.
 b. Santa has lost a lot of weight, *I regret.
 c. I see that Harry drank all the beer, didn't he?
 d. *I am sorry that Suzanne isn't here, is she?

Hooper/Thompson (1973: 479-481)

ドイツ語の述語に関してはどのような変形が可能なのかは別途検討する必要があるが、本研究において注目したいのは、変形ではなく、述語ごとに補文命題が前提であるか、主張でありうるかが異なることである。

知識状態に関わる述語では、補文命題が主張の対象でありうる。つまり、コミュニケーションにおいて、知識関連の形容詞述語は後続の補文で新情報を導入し、共通知識 (common knowledge cf. Stalnaker 1973) を更新する形で用いることができると考えられる。

Paranhos Zitterbart (2002)によれば、es は既出情報のシグナルであった。es は新情報を導入する知識状態に関わる形容詞述語とは相性が悪く、今回の調査で出現しにくい傾向が見られたのではないか。他方、toll, schön, schade など、前提となる命題の評価に関わる形容詞では、es の出現率は高かったと言える。

最後に、主語としての相関詞 es が、命題の真偽がオープンであっても出現しているケースを紹介する。形容詞 unklar の収集事例より、(17)は es を伴わない例、(18)は es を伴う例である。(17') (18')でそれぞれの文脈を確認する。

- (17) Laut Polizei ist **unklar**, wie die Täter in das Fahrzeug gelangen konnten.

警察によると、犯人がどうやって車内に侵入できたのかは不明である。

(BRZ09/JUN.12987 Braunschweiger Zeitung, 27.06.2009; Autoeinbruch am Stederdorfer Friedhof)

- (18) Laut Polizei ist **es unklar**, ob beide Delikte im Zusammenhang stehen.

警察によると、両事件が関連しているかどうかは不明である。

(BRZ09/NOV.05651 Braunschweiger Zeitung, 12.11.2009; Diebe stehlen Auto und Kennzeichen)

(17') Ein Portmonee, eine Brieftasche und ein Handy haben Unbekannte am Donnerstag in der Zeit von 11 bis 12 Uhr aus einem Auto am Stederdorfer Friedhof gestohlen. Laut Polizei ist **unklar**, wie die Täter in das Fahrzeug gelangen konnten. Der Schaden wird mit rund 300 Euro beziffert.

小銭入れ、札入れ、携帯電話を何者かが木曜日の 11 時から 12 時に Stederdorf 墓地に駐車中の自動車から盗んだ。警察によると、犯人がどうやって車内に侵入できたのかは不明である。被害額は約 300 ユーロと推定される。

(BRZ09/JUN.12987 Braunschweiger Zeitung, 27.06.2009; Autoeinbruch am Stederdorfer Friedhof)

(17')では、まず、盗難被害の日時や場所の情報が提示され、次に(17)の文で盗難の方法が不明であることが述べられた後、被害金額が伝えられている。詳細不明な部分もあるが、何を、誰が、いつ、どこで、どのように、いくら、といった情報が順番に提供されている。

(18') Von einem auf dem Grundstück in der Dorfstraße abgestellten Mazda entwendeten Unbekannte zwischen Montagmittag und Dienstagfrüh beide Kennzeichen. Der Schaden beträgt rund 70 Euro. [...] Nicht weit entfernt von diesem Tatort entwendeten Unbekannte vermutlich in der Nacht auf den 10. November vom Betriebshof der Firma Toyota in Neudorf-Platendorf einen silbernen Corolla Verso im Wert von rund 12 000 Euro. Laut Polizei ist es **unklar**, ob beide Delikte im Zusammenhang stehen.

Dorf 通りの敷地に停められていたマツダの自動車から、何者かが月曜正午から火曜朝の間にナンバープレートを両方とも盗んだ。被害額は約 70 ユーロである。(中略) この犯行現場からそう遠くないところで、何者かがおそらく 11 月 10 日の夜、Neudorf-Platendorf にあるトヨタ社の営業所から約 12000 ユーロする銀色のカローラ Verso を盗んだ。警察によると、両事件が関連しているかどうかは不明である。

(BRZ09/NOV.05651 Braunschweiger Zeitung, 12.11.2009; Diebe stehlen Auto und Kennzeichen)

(18')では、まず日本車のナンバープレートの盗難の日時や場所、被害金額の情報が提示され、次に、近くで起きた別の日本車の盗難についても日時や場所、被害金額が伝えられた後、(18)の文で両事件の関係性が不明であることが述べられている。日本車にまつわる盗難事件が 2 件紹介され、その 2 件の事件が近所で続けて起きているという情報も提供されていることから、(18)の文を読む前に、両事件の関連性が疑われることが汲み取れる。

既出情報のシグナルの es は、既に書き手と読み手との間で共有されていると思われる情報であれば、(18)のような命題の真偽が定まっていないケースでも出現すると考えられる。

7. まとめ

本研究では、前域の es との曖昧性を排除するため、中域に位置する主語としての相関詞 es に注目した。相関詞 es の出現は基本的に任意と考えられるが、コーパスで事例を収集したところ、形容詞述語ごとに es の出現・非出現の傾向があることがわかった。bekannt, unklar, klar, fraglich といった知識関連の形容詞は、中域に es が出現しづらい。知識関連の形容詞は、コミュニケーション上、文脈

に新しい情報を導入することができ、既出情報シグナルの *es* の出現率は低いと考えられる。

相関詞 *es* の出現は基本的に任意であり、情報構造との関連で決まるという点で、本研究は Paranhos Zitterbart (2002) の主張を支持するものである。しかし、実例調査において、任意の出現の中にも形容詞述語ごとに傾向が見られたことは重要であると考ええる。形容詞述語の意味は、情報構造上どのように用いられるかという語用論的な観点とつながっており、相関詞の出現・非出現の傾向に影響を及ぼしているものと考ええる。

今回の調査では、定動詞を直説法現在形の *ist* に限ったが、今後、直説法過去形 *war* や接続法第 2 式 *wäre* など、他の法・時制についても事例を収集し、より詳細な傾向の分析を行いたい。

参考文献

- Axel-Tober, Katrin, Anke Holler & Helena Krause (2016): Correlative *es* vs. *das* in German: An empirical perspective. In: Werner Frey, André Meinunger & Kerstin Schwabe (eds.), *Inner-sentential Propositional Proforms: Syntactic properties and interpretative effects*. Amsterdam, Philadelphia: John Benjamins, 49-72.
- Hooper, Joan B. & Sandra A. Thompson (1973): On the Applicability of Root Transformations. *Linguistic Inquiry* 4.4, 465-497.
- Pütz, Herbert (1975): *Über die Syntax der Pronominalform 'es' im modernen Deutsch*. Tübingen: Narr.
- Pütz, Herbert (1991): *Es* im Mittelfeld in Kopulasätzen mit prädikativem Adjektiv und folgendem Subjektsatz. In: Elisabeth Feldbusch, Reiner Pogarell & Cornelia Weiß(eds.) *Neue Fragen der Linguistik: Akten des 25. Linguistischen Kolloquiums, Paderborn 1990*. Bd. 1. Tübingen: Niemeyer, 297-305.
- Stalnaker, Robert (1973): Presuppositions. *Journal of Philosophical Logic* 2(4), 447-457.
- Ulvestad, Bjarne & Henning Bergenholtz (1983): *Es* als „Vorgreifer“ eines Objektsatzes. Teil II. *Deutsche Sprache* 11, 1-26.
- 吉田光演 (1997) 「ドイツ語の虚辞 *es* の統語論」 広島大学総合科学部紀要 V, 言語文化研究 23, 73-91.
- Paranhos Zitterbart, Jussara (2002): Zur Mittelfeldfähigkeit des Korrelates *es* in Verbindung mit Subjektsätzen. *Sprachwissenschaft* 27(2), 149-195.
- IDS コーパス検索システム <https://cosmas2.ids-mannheim.de/cosmas2-web/> 最終アクセス 2025/10/16

実例調査データ件数表：各形容詞の中域の es の出現率（小数点以下四捨五入）

形容詞	es あり	es なし	事例合計	出現率	収集①'	収集②'
wichtig	4573	1294	5867	78%	4820	6185
klar	309	3171	3480	9%	330	5034
gut	814	8	822	99%	1071	3319
möglich	1459	15	1474	99%	1694	1152
schön	284	1	285	100%	312	2320
bekannt	11	1088	1099	1%	14	2068
schwer	234	29	263	89%	330	1279
richtig	249	29	278	90%	415	1078
schade	230	2	232	99%	252	1192
notwendig	430	3	433	99%	481	753
besser	279	0	279	100%	353	880
schwierig	314	5	319	98%	367	763
unklar	11	736	747	1%	11	1017
egal	487	74	561	87%	529	438
toll	65	0	65	100%	71	784
fraglich	162	262	424	38%	170	657
erstaunlich	119	30	149	80%	125	636
nötig	144	2	146	99%	163	569
sinnvoll	313	0	313	100%	401	288
erfreulich	109	25	134	81%	115	526

いわゆる「任意の es」をめぐって¹

田中 慎

1. 現象 : es の三つのタイプ²

代名詞 es は、その出現の仕方から 3 つのタイプに分類される。文中のどこにでも現れ、「省略」できない es (タイプ I)、前域のみに現れ、前域に他の要素が来たり、前域のない副文などには現れない es (タイプ II)、同じ場所で出現したり、しなかったりすることができる、いわゆる任意の es (タイプ III) の三つである。以下にそれぞれのタイプと主な出現の環境を挙げる。

タイプ I : 消えない es : 中域でも必須

(1) a. *Hier regnet es viel.* (天候動詞)

b. *In diesem Bett schläft es sich gut.* (中動態構文)

タイプ II : 消える es : 前域のみに現れる

(2) a. *Hier wird (*es) hart gearbeitet.* ← *Es wird hier hart gearbeitet.* (自動詞受動)

b. **dass es jemand angerufen hat.* ← *Es hat jemand angerufen.* (前域の es)

タイプ III : 消えたり、消えなかったりする es

(3) a. *Damit lässt (es) sich entspannter leben.* (lassen-中動態)

b. *Mir ist (?es) kalt.* (感覚, 感情表現)

本論考では、このうちタイプ III のいわゆる任意の es を中心に扱う。これらの es は、現れる場合とそうでない場合とで明確な意味の差はないとされ、その出現は、個人差, 地方差として説明されることも多い。本論考では、その出現の「任意」性について検討し、その上で、この任意の es の出現は文脈に大きく左右されること、そしてその出現の「任意性」を保証する es の構造的特徴について述べていきたい。

¹ 表題の「いわゆる」という形容は、その任意性は、話し手が気分等で勝手につけたり、つけなかったりするというわけではなく、es によって表されているものがあり、それが文中の他の要素と衝突することにより出現しなくなるというしくみが背後にあることを主張したいことからのものである。

² 本論文では、特に明確な指示対象をもたないタイプの es を扱う。明確な指示対象を持つものとして、中性名詞を指す es、および（主に後続する）事象、命題などを受ける相関詞 es が挙げられる。しかしながら、Bolinger (1977) が英語の there について、Weinrich (2007) がドイツ語の es について指摘しているように、本論で扱うタイプの es も、いわゆるなにも指さない虚辞ではなくなんらかの対象を指し示すという意味で上記のタイプの es と機能上連続体を形成し、それゆえドイツ語では同一の形態素である es が用いられていると主張する。

本論考の構成は、以下のとおりである。まず第二章でタイプ I, タイプ II を中心に *es* の出現・非出現の義務性を Haider (2019) に依拠し考察する。第三章では、タイプ III の構造的特徴を確認した後、Ogawa (2012) で提案された出現・非出現を左右する機能的側面を考察し、それについての量的な確認を行う。第四章では、小川の提案がタイプ III 全体を説明するものではなく、部分的な有効性にとどまっていることを確認する。つづく第五章では、Jakobs (2022) の提案を応用する形で *es* の項構造を吟味し、*es* の任意性を可能にする構造的特徴を提案する。第六章で議論をまとめ、残る課題について言及する。

2. *es* の構造のちがい：空項 (void argument) と虚辞 (expletive)

Haider (2019, 2017) は、タイプ I と II は、ドイツ語ではたまたま同じ形態素 (*es*) で実現されるが異なった構造を表す別なものと考えた。それによると、タイプ I は、意味的空項 (semantically void argument) である。これは、特定の意味内容を持たないが、動詞が指定する項であり、それゆえ省略できない必須成分であるというものである。

一方で、タイプ II は、統語構造における非項位置 (non-argument position) を埋める虚辞であり、その統語環境によって出現・非出現が決まるものとした。ここでの統語環境とは、他に前域を埋める要素がない場合を指し、その場合に *es* が出現しこの場所を埋めることになる。このように *es* の出現は構造的に決まっているもので (動詞の項の位置に生成されるか否か)、その意味で *es* がどのタイプに属するかは一義的に決定され、個人差、地域差などのヴァリエーションは基本的にないことになる。

この構造の違いは、ドイツ語では *es* の義務性にのみ現れ、直接観察可能な形態的な違いはない。一方でドイツ語と近い言語であるオランダ語においては、この構造の異なる二つのタイプは、それぞれ違う形態素で表される。すなわち項であるタイプ I は *het* で、非項であるタイプ II は *er* で表される。

それでは、タイプ III はどうであろうか。Haider は、出現・非出現が任意であるタイプ III についてあまり突っ込んだ議論はしていないが、タイプ I と同じ空項であると考えている。オランダ語で同様のタイプの表現では *het* が使われるということもこの分類を支持していると言えるだろう。一方で、Haider には、*es* が形態的に表れないケースについての明確な説明はない。では、タイプ III における出現・非出現はどのように予測されるのであろうか。

3. 「任意」の *es*：機能的説明

いわゆる任意の *es* については、地域差、個人差を指摘する見解が優勢なよう

に思われる。Höhle (1978: 63) は以下のように述べている。

„[...] wie es Sprecher gibt, die nur ‚mir wurde schlecht‘ ohne *es* akzeptieren, und solche, die nur ‚mir wurde es schlecht‘ mit *es* akzeptieren, sowie solche, die beides einwandfrei finden, so mag es auch bei reflexivem *lass-* neben den geschilderten Dialekten mit fakultativem *es* solche mit obligatorisch anwesendem sowie solche mit obligatorisch abwesenden *es* geben.“

Höhle は、*mir wurde schlecht* のような感覚表現において *es* を付けるかつけないか、あるいはどちらも許容するかについては個人差、方言差があるが、同じタイプ III の *lassen*-中動態においても同様の個人的、方言的ヴァリエーションが存在するとしている。

一方で、Ogawa (2012) は、*es* の出現は機能と深く結びついていることを主張し、以下の観察を行っている。

- (4) a. *Mir ist (*es) schlecht.*
 b. *Mir ist (??es) kalt.*
 c. *Mir ist ??(es) kalt hier.*
 d. *Mir ist *(es) zu kalt hier.*

(4) の各文で、同じ感覚表現でも具合の悪い (*schlecht*) のような非常に個人的な感覚の際に *es* は生起しないとした。また、ある程度一般性のある感覚である *kalt* についても、その感覚が個人的なもの (b), *hier* などの副詞により談話場面での一般性を持ったもの (c), あるいは寒すぎる (*zu kalt*) など極端な寒さで他人にも容易にアクセスできる場合 (d) で、*es* の生起の度合いが異なることを示した。これらをまとめると、主観的な感覚、感情を表現する場合 *es* は通常生起せず、一方でその感覚、感情が客観的にアクセス可能な一般性を帯びるにつれ *es* は現れる傾向があるということである。このことにより、Ogawa は、*es* は感覚、感情を感じる経験主からの隔たりを表す客観的環境 (*objektive Ambienz*) を表すものであると考えた。

このことについて、まず Ogawa の容認性の判断を確認してみよう。

表 1 : 感覚表現と *es* の出現

(4a) <i>Mir ist es schlecht.</i>	3.9
(4b) <i>Mir ist es kalt.</i>	3.1
(4c) <i>Mir ist es kalt hier.</i>	2.5
(4d) <i>Mir ist es zu kalt hier.</i>	1.5

*1（非常に自然）～5（非常に不自然）までの評価の平均

表1は、すべて *es* が出現している例を挙げ、その自然さについて質問した結果である。この調査は、サンプル数が非常に限られた仮の調査であるが、上から下に行くにつれ自然な表現であるという判断が明らかに上昇している。(4a)の *Mir ist es schlecht.* が 3.9 と明らかに低い容認性を示している一方、(4d)の *Mir ist es zu kalt hier.* では、1.5 と高い容認性を示している。この結果は Ogawa の判断を支持するものであると考えられるだろう。³

Ogawa が主張している、*es* が客観的環境を表しているということに関しても、次の簡単な調査がその主張を支持するものであるといえよう。

表 2: *es* の任意性と人称 (Tanaka 2010)

<i>Mir ist es kalt.</i>	<i>Mir ist kalt.</i>	<i>Ihm ist es kalt.</i>	<i>Ihm ist kalt.</i>	<i>Dir ist es kalt.</i>	<i>Dir ist kalt.</i>
21.900*	5.640.000	12.600	43.100	309.000	2.920.000
1 : 257,5		1 : 3,4		1 : 9,4	

*)google 検索 (2010 年当時) における登場回数

表2は、人称ごとに感覚表現における *es* の出現の頻度を調査したものである。一人称、すなわち話し手の主観に直接関係する場合、*es* はほとんど出現しない。一方、主観から離れた人称である三人称では、*es* ありとなしの割合は、1 対 3.4 であり、*es* の出現は少数派ではあるものの比較的現れやすい。二人称では、この割合は中間的なものとなっている。このように、Ogawa の「*es* は客観的環境を表し、言語化される事象が主観的になるほど *es* は生起しない」という主張は、感覚、感情表現に関しては本質をつくものであると言える。

では、この主張は、同じ任意的 *es* が確認される *lassen*-中動態においても確認できるのだろうか？*es* はここでも「客観的環境」を反映しているのだろうか？

4. *lassen*-中動態とそのモダリティ

例文 (6) のように、自動詞で作られる *lassen*-中動態においてその主語は *es* で現れるが、その際、カッコが示すようにこの *es* は出現しないこともある。一方で、*lassen* を用いない中動態は、Haider のタイプ I に属するもので、*es* は省略されない。

³ なおこの簡易的な調査でも、かなりの程度の個人差が観察された。*es* の出現、非出現が個人差、方言差という見解は実態を反映していると思われる。

(6) *Hier lässt (es) sich gut leben.*

(7) *Hier lebt *(es) sich gut.*

ここで (6), (7) はほぼ同じ意味内容を表すものであり, *es* によって客観的環境が提示されるという, 感覚, 感情表現で観察された機能的な違いはそのままの形ではあてはまらない。では, この *es* の任意性はどこから来るのであろうか?

鈴木 (2014) は, 中動態の性質を以下のようにまとめている:

- (a) 意味上の目的語 (ときに具格や位格) が主語になる。
- (b) 実際のイベントを前提としない。
- (c) 主語の恒常的性質を述べ, 多く様態・程度の副詞を伴う。
- (d) 動作主が生起しない。
- (e) 現在形が支配的である。

これらの性質について, *lassen*-中動態の特徴としてそのままあてはまるのは, (a) (条件付きで (d) ⁴) のみである。*lassen*-中動態は, 実際のイベントを描写することもあり, 主語の恒常的性質の描写に限られず様態・程度の副詞を必要とせず (8b), かつ過去形でも問題なく用いられる (9b)。

(8) a. *In diesem Bett schläft *(es) sich *(gut).*

b. *In diesem Bett lässt (es) sich (gut) schlafen.*

(9) a. *?In diesem Bett schlief es sich gut.*

b. *In diesem Bett ließ sich gut schlafen.*

一言で言うと, *lassen*-中動態は, 中動態よりもより幅の広い適用範囲を持つ。これらの中動構文は可能性のモダリティを表すとされるが, この可能性の範囲についても違いが見られる。中動態では, 通常主語に内在する可能性 (*dispositionelle Möglichkeit*) を表すのに対し, *lassen*-中動態では, 外的な条件により可能になる可能性 (*zirkumstantielle Möglichkeit*) も表現される。例えば, 下の例の (10) では条件節, (11) では前置詞句によって外的な条件が与えられている。

⁴ Fujinawa (2004:35.f) は, 動作主前置詞句について, 中動態においては完全に排除される一方, *lassen*-中動態については, 完全には排除されないものの下の例を引いて *generisch* な動作主を表す場合に限りしていると指摘している。

(i) *Das Rad lässt sich von jedem Kind drehen.*

- (10) *Wenn wir noch Zeit haben, lässt es sich an der Perfektion arbeiten.*
 (11) *In Anbetracht der schwierigen Weltlage lässt es sich mit einem Jein nicht regieren.*

ここで思い起こされるのは、Ogawa の客観的環境という概念である。外的な条件は（客観的）環境と見なすことができるだろう。では、これが es の生起と関係しているのであろうか？⁵

表 3：lassen-中動態における es の出現と容認度

	mit es	ohne es
(10) <i>Wenn wir noch Zeit haben, lässt (es) sich an der Perfektion arbeiten.</i>	3,4*	2,0
(11) <i>In Anbetracht der schwierigen Weltlage lässt (es) sich mit einem Jein nicht regieren.</i>	3,2	2,2
(12) <i>In München ließ (es) sich gut leben.</i>	1,7	2,7

*1（非常に自然）～5（非常に不自然）までの評価の平均

表 3 は、ネイティブスピーカーにおける容認度のテストの結果である。サンプルは非常に少ない予備調査であるが、かなり明確な容認度の違いが観察される。その際、予期とはむしろ逆に、外的な条件が加わった場合に es の出現はむしろ不自然という結果が出た。(10), (11)では上記のように（客観的）環境によって規定された場合であるが、es が生起しない方が容認度は高い（それぞれ 2.0 と 2.2）。一方で (12) のような「ミュンヘン」という場所一般の性質を述べている場合は、es が生起した方が自然であるとされた（1.7 対 2.7）。

以上のように、Ogawa が感覚、感情表現において指摘した任意の es の出現の傾向は、lassen-中動態にはあてはまらないことになる。Ogawa の観察は、感覚、感情表現においては有効なものである一方、これを一般化し、es を単純に（客観的）環境を明示するものと考えすることはできないということになる。では、es は何を指しているのであろうか？

⁵ 井坂（2024）は、動詞目的語の相関詞 es の出現・非出現についての詳細な分析を行ったが、その際に wenn 節がある場合には、es の出現頻度が非常に高い（80%程度）であることを指摘している。

(i) *Ich bin aus Versehen in den Berufsverkehr geraten. Ich hasse (es), wenn das passiert.*

(ii) *Er bedaure (es), wenn der eine oder andere Abgeordnete Schwierigkeiten habe, zuzustimmen.*

これは、Höhle や本論考で述べる観察とは異なった特徴であると言えるが、このことから es の出現・非出現は一つの原理だけでは十分に説明されないことが伺える。

5. es が指し示すもの：任意項の拡大

前節では、外的な規定がある場合 *es* はむしろ出にくいことを述べた。これと類似した観察を Höhle (1978) が行っている。Höhle は、*es* の出現には個人差、方言差があることを確認した上で、lassen-中動態の文が、三格目的語 (13) や前置詞目的語 (14) などの他の項によって規定されている場合、*es* は許容されないとし、次の例を挙げている。

(13) *Einem so verbohrten Kerl läßt (*es) sich schwer helfen.* (Höhle 1978:63)

(14) *Auf eine solche Gelegenheit läßt (*es) sich wirklich einmal anstoßen.*

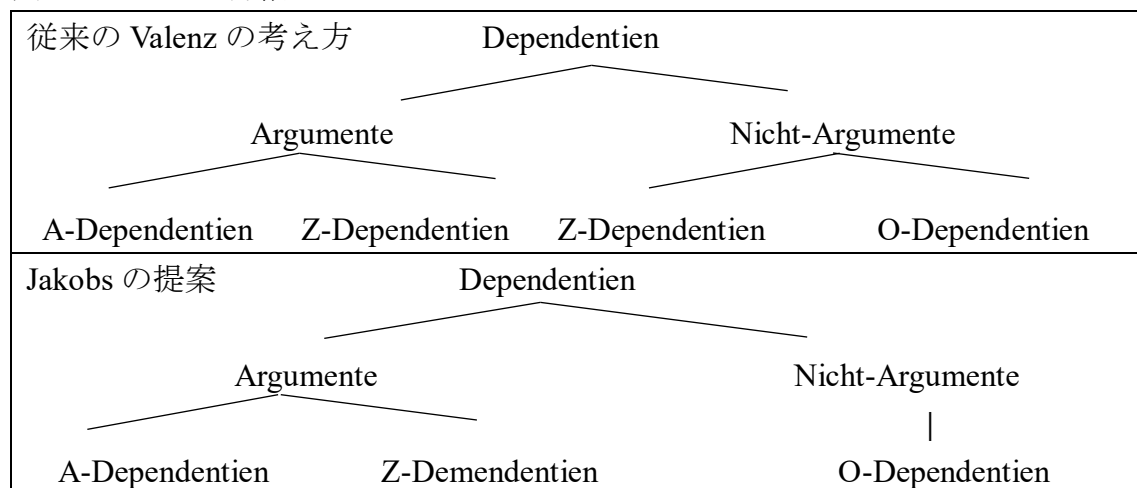
このことから、*es* は他の項による規定と重複する場合に脱落するという仮説が成り立つ。以下に項の任意性とその出現、非出現を司る要因について考察をすすめていこう。

Haider は、任意の *es* を持つタイプ III は空項であると想定した。タイプ III の *es* の出現は任意であるから、このことから Haider の枠組みでは、当該の項は任意項 (fakultatives Argument) であることを意味する。一般に任意項とされるのはは以下のようなものである。

(15) *Er überreicht (ihr) den Pokal.*

例 (15) における三格目的語 *ihr* は、überreichen の項であるが文脈によって脱落可能な任意項とされる。このような任意項は、一般的な項の理解では文脈に強く依存したかなり限られた現象であるが、Jakobs (2022) は、文に必須ではない付加成分である状況句 (Zirkumstanzen) も項と考えるべきであることを主張した。それにより項の範囲は大きく拡大することになる。

図 1：Valenz の再編



Jakobs は、事象句も対象として記述するディビッドソンの意味論を応用することにより、ヴァレンツ理論の再編を提案した。考え方の骨子は、従来の考え方では、項と非項の両方に分類されていた状況句を、その意味的、統語的ふるまいを根拠に、項とすることである。この結果、文中で非項にあたるものは、様態、認識、評価の副詞 (O-Dependentien) に限られる。項となる A-Dependentien および Z-Dependentien は、動詞による選択制限 (sortale Beschränkungen)、代名詞によって受けることが可能 (pronomisierbar)、疑問の対象になる (erfragbar)、関係句で修飾可能 (relativierbar)、分裂文の焦点になる (absplaltbar)、左方移動、右方移動が可能 (satzperiphere Position)、名詞句の後方に来ることができる (postnominal) などの性質により、O-Dependentien とは明確に区別される。その際、項には、義務的なもの (主に A-Dependentien) と任意的なもの (Z-Dependentien) があるとしたが、このことが従来のヴァレンツ理論の概念と大きく異なるものとなっている。従来は、項は基本的に必須成分であり、任意の項は、上の (15) の文で挙げたような例外的なものであった。しかしながら、Jakobs の提案により、任意的、すなわち文脈に強く左右されて実現する項として Z-Dependentien が位置づけられることになる。Z-Dependentien として実現する時や場所、原因などを表す前置詞句や副詞句は、まさに時と場合によって言語化されて表示されるのである。

このように Jakobs の提案に沿って項の概念を拡大して考えることによって、es の出現、非出現も的確に記述されると考えられる。本論考の中心である任意の es は、この Z-Dependentien の空項と考えることができるだろう。特に他の規定がない場合には、空項としての es が現れるが、Höhle が指摘しているように他の具体的な規定がある場合は、es の出現はブロックされることになる。一方で、出現する任意の es は、時、場所、原因などの状況を一般的に設定する要素と考えることができ、その意味で Ogawa の主張する客観的環境と通じるものと考えることができる。⁶

これに対して、タイプ I に見られる義務的な es は、A-Dependentien の空項と位置付けられる。それゆえ es は脱落せず、構造的に必須の要素ということになる。義務的な es は主語の空項であり、なんらかの名詞句の代わりに立つもので

⁶ ここで「状況を一般的に設定する」という言い回しは、Bolinger (1977) で用いられている "generalized location" という語を言い換えたものと理解されたい。Bolinger は、いわゆる存在の there (existential *there*) について以下のような説明をして場所を示す there を拡張したものと見なしている。

"[...] my intention is to show that 'existential' *there* is an extension of locative *there*, with a meaning that refers to a generalized 'location' in the same abstract way that the anaphoric *it* refers to a generalized 'identity' in *It was Jahn who said that*. (同書 91-92.)

Ogawa (2012) も、この generalized location を示唆する Bolinger の用語 *ambience* から *objektive Ambienz* という用語を導入している (p.c.)。

ある。

ドイツ語の *es* は、代名詞として一般に、対象、状況、事象、命題、テキストなどさまざまな要素を受ける。任意の *es* はアクセントを持たず、状況設定をするものとして状況を弱く受ける。他の状況句が出る場合、*es* は脱落しやすく、また先行する状況句を強く受ける場合は *da* を用いる。このことから *es* の強形は名詞句である A-Dependentien を受ける *das* のみではなく、前置詞句や副詞句で実現される Z-Dependentien を受ける *da* があると考えられることができるだろう。

(16) a. *Es regnet.*

b. *Wie das heute wieder regnet!*

(17) a. *Es entsteht eine neue Siedlung für junge Familien.*

b. *Da entsteht eine neue Siedlung für junge Familien.*

(16b) では、直示的に強く対象を指示する場合に強形 *das* を用いる。弱形 *es* は、状況を弱く設定する、いわば Langacker が言う *grounding* の機能を果たしていると言えよう。(17b) についても、強形 *da* が場所的ないしは時間的な指示を表している一方で、*es* は特定の場所を念頭に置きつつもそれを積極的に指すものではない。(16)、(17) はそれぞれタイプ I とタイプ II の例であるが、この指示の強さによる分化は代名詞 *es* 全体にあてはまるものと考えられることができるだろう。

6. 残された課題？

本論考での議論は以下のようにまとめられる：

- ・代名詞 *es* は、ドイツ語では同一の形態素によって実現するが、その出現の特徴から大きく 3 つの種類に分類される。
- ・第一の分類は、項であるか (*void argument*)、否か (*expletive*) という基準。
- ・第二の分類は、必須な項か任意な項かという基準。
- ・形態的に弱形は同じ形 (*es*) をしているが、強形 (アクセントを持つ場合) の場合、これらは分化して現れる (*das / da*)。
- ・弱形の *es* は、状況を弱く指示するもので、他に状況を規定する要素があると、*es* は出現しない。

ここで問題として残るのは、Ogawa (2012) の観察との不整合である。Ogawa は、例文 (4) に挙げたように、*Mir ist (es) kalt.* と *Mir ist (es) kalt hier.* において、後者、すなわち *hier* によって状況が特定されると *es* は現れやすいことを指摘し、*es* は客観的環境 (*objektive Ambienz*) を提示するものという解釈を提示した。一

方、本論考の議論では、hier などの場所を表す副詞によって状況が詳しく規定されている場合には es はむしろ生じない傾向にあるということを述べた。これらの説明は互いに相容れない説明であるように思われる。⁷ これはどのように解決されうるだろうか？

Ogawa は、感覚・感情表現の観察から上の結論を導いた。一方本論考の議論は基本的に lassen-中動態の観察に基づいたものである。また、註 5 で言及した井坂の観察は動詞の目的語空項が wenn 節により規定されたケースを扱ったものであった。これらの現象における es の出現は、それぞれ別の原理で働いているのであろうか？

Weinrich (⁴2007) は、代名詞 es を地平代名詞 (Horizont-Pronomen) と呼称し、その様々な用法に一つの共通の機能があることを指摘している。Weinrich は「地平」(Horizont) を「目立たない形で提示されたデータの複合的集合」(同書 390 ページ) と定義した上でさまざまな「地平」を挙げ、es の機能は、それらを指示することであると考えた。この「地平」を Weinrich は以下のように分類している：

(1) textueller Horizont

(2) situativer Horizont

(A) Natur-Horizont, (B) Zeit-Horizont, (C) Leiblich-seelisches Horizont, (D) Sinnes Horizont, (E) Gesellschaft-Horizont

Weinrich は、まず、es を同一テキスト内でかかる endophorisch なものとテキスト外にかかる exophorisch なものに分類し、後者をさらにいくつかの局面に分けている。本論考で議論されているものは (2) の状況的地平である。Ogawa は、このうち、(C) と (D) の「身体的、心的および感覚的なデータの複合的集合」における es のふるまいを分析し、その際に「客観的環境」が es によって提示されることを提案した。また、井坂の相関詞についての議論は (1) のテキスト内地平における現象である。一方で本論考は、「状況的地平」において「目立たない形で提示されたものにかかる」、言い換えると「漠然した状況にかかる」ものとしての es の役割に注目したと言えるだろう。これらの、es が何をどのレベルでどのように受けているのかについてのそれぞれ異なった「地平」についてのアプローチとその結論がどのような形で関係しているのか、あるいは関係しない

⁷ 任意の es と他の規定の共起について、Ogawa (2012) と本論考では異なった分布を指摘しているが、これらが共起しうるのか、それとも排除し合うのかは構文全体の意味と関係している可能性がある。Bolinger (1977) は、there と他の場所表示との関係を記述しているが、この際に場所表現の文中での語順なども there の出現に影響を与えることを示唆している。このことと同様に、es の出現、非出現についてもより詳細な分析が必要であると考えられる。

のかについては、今後の課題としたい。

参考文献

- Bolinger, Dwight (1977): *Meaning and Form*. London/New York: Longman.
- Fujinawa, Yasuhiro (2004): Kasus bei passivischer Diathese im Deutschen – Mittelkonstruktion im Vergleich mit modalen Infinitivkonstruktionen aus Sicht der Grammatikalisierung. In: *Neue Beiträge zur Germanistik 3-2*. 34-47. Japanische Gesellschaft für Germanistik.
- Haider, Hubert (2019): On expletive, semantically void, and absent subjects. In Pöll, Bernhard & Herbeck, Peter & Wolfgruber, Anne (eds.), *Semantic and syntactic aspects of impersonality (Linguistische Berichte – Sonderhefte)*, Vol. 26, 11–46. Hamburg: Helmut Buske Verlag.
- Haider, Hubert (2017): "In the absence of a subject." In Clemens Mayr / Edwin Williams eds. *Festschrift für Martin Prinzhorn (wlg #82)*. 87-98. Wien: Institut für Sprachwissenschaft.
- Höhle, Tilman N. (1978): *Lexikalistische Syntax. Die Aktiv-Passiv-Relation und andere Infinitivkonstruktionen im Deutschen*. Tübingen: Niemeyer.
- 井坂ゆかり (2024): 現代ドイツ語の目的語としての相関詞 *es* の出現／非出現と選択制限. 博士論文. 東京外国語大学.
- Jakobs, Joachim (2022): *Zirkumstantien sind Argumente*. Unpubliziertes Manuskript. <https://www.researchgate.net/publication/362569651>.
- Ogawa, Akio (2012): Zur Typologie der Witterungs-, Klima- und daran angrenzenden Prädikate – unter besonderer Berücksichtigung des Deutschen und des Japanischen. In: Redder, A./Ogawa, A./Kameyama, Sh. (Hg.). *Unpersönliche Konstruktionen. Prädikatsformen funktional und sprachübergreifend betrachtet*. München: iudicium. 201-212.
- 鈴木直樹 (2014): 他動性の消失と中間構文のコード化. In: *Neue Beiträge zur Germanistik 13/2*, 12-27. 日本独文学会.
- Tanaka, Shin (2020): Artikel als Markierung der Ambienz. in: Miyashita, H./ Fujinawa, Y. / Tanaka, Sh. (Hg.) in: *Form, Struktur und Bedeutung*. Tübingen: Stauffenburg. 183-194.
- Tanaka, Shin (2010): Kombinatorik zweier „Personensysteme“: zur Universalität der „Unpersönlichkeit“. Vortrag beim 12. IVG-Kongress 2010 Warschau.
- Weinrich, Harald (⁴2007): *Textgrammatik der deutschen Sprache*. Baden-Baden: Olms.

シンポジウムにおける議論のまとめ

最後に本叢書のもととなったシンポジウムにおける参加者との議論をまとめてみたい。以下ではまず個別の発表に対する質疑応答についてまとめ、続いてシンポジウム全体での議論について報告したい。

宮下の発表に対しては、構文文法を採用した場合、*es* に指示性を認めることになるのかという質問がなされた。これに対しては非人称で現れる *es* 自体に指示性があるとは想定せず、*es* と動詞句からなる構文全体が動詞で表される事態に自然発生的な捉え方を付与すると考えることになるという返答がなされた。また *es* 単独による指示とは考えないものの、*es* を含む構文全体が動作主の関わらない事態や環境を指示するとは言えるかもしれないとの付言もなされた。

伊藤の発表に対しては、提案された分析が CP 分析を標榜しつつも、代名詞の生起に統語的な制限をかけていくという点では本質的には TP 分析とあまり変わらないのではないかという指摘がなされた。確かにそういった側面は少なからず認められるものの、前域の *es* の基底生成位置をあくまで CP 指定部と考えている点を鑑みると、TP 分析とは一線を画すものと言えるのではないかとの返答がなされた。また、代名詞の生起が不可である理由に関して、ドイツ語の分裂文では *Er ist es, der kommt* のように人称代名詞 *er* が *es* に先行することから、その説明を導き出すことはできないかという質問も出された。これについては山崎 (2020) で報告されているように、*Es ist er, der kommt* のような *es* が *er* に先行する語順についても文脈を整えれば容認可能になることから、直ちに前域の *es* との並行性を見出すことは難しいと思われるとの応答があった。他にも会場からは、副文や命令文において前域の *es* の生起が不可であることについてはどういった説明が与えられるのかという質問も出された。これについては、提案した分析においては前域の *es* の CP 指定部での基底生成を想定しているため、副文や命令文において前域が基本的には使用不可となることに由来するが、そもそもそれが何故なのかに関するより詳細な分析は今後の課題とする旨の返答がなされた。

井坂の発表については、形容詞述語ごとに相関詞 *es* の出現率の調査を行っているが、事例数が足りていない形容詞述語もあるのではないかという指摘があった。これに対し、発表内の調査でも傾向の概要を把握することはできるとの返答が行われた。さらに補足として、綿密な調査を規模の大きいコーパスで行うためには、検索式を定め対象を限定するなど、手作業の要素を省く必要があるが、語用論的な観点から相関詞を研究するためには実例に目を通すことも重要なため、量的・質的研究のバランスを保った良い方策を考えたいというコメントがなされた。

田中発表に対しては、田中が Jakobs (2022) の提案した *Zirkumstantien* (状況句) を項と考えるという見解を応用し、任意の *es* が現れるタイプ III の *es* もこの状況句であると想定することから帰結する解釈の問題についての質問が寄せられた。この質問は具体的には、任意の *es* が状況句であるという田中の設定から、*es* が出現した場合には具体的に存在する事象を表すことになるのか、逆に *es* が脱落すると抽象的、一般的な事象を表すのかという質問であったと理解された。この質問に対して、*es* の出現・非出現はその文の描写される具体性、現実性には直接関係がないと考える旨が述べられた。理由としては、任意の *es* は状況句の空項として、本論文中にもあるように、命題を具体的な事象につなげる *grounding* に似た役割を果たすが、ドイツ語(や他の多くのヨーロッパ言語)では、命題の同定はあくまで述部の定性によって表示されるもので、例えば *gestern* や *im Garten* などの状況句はそれをより詳しく規定するものと考えからである。これは、Jakobs (2022) が状況句について、項の中で *Modifizierer* に分類していることからそのような解釈にいたった。このことから、*es* の出現と事象の具体性・一般性は直接関係していないとされた。

シンポジウム全体に関わる問題としては、特に各発表者が構文文法、生成文法、情報構造などに依拠して個別の *es* の用法に関して説明を与えているが、そのような個別の説明を超えて、例えば機能的説明と構造的説明のどちらがふさわしいのかといった論点にどのようにつながるのかという質問があった。この点に関しては伊藤発表では扱われているが、他では多く言及されていない。これに対して伊藤発表の構造的説明は、例えば Weinrich (2001) の *erzählte Welt* との関連で前域の *es* を考察するなど、他にも機能的説明の可能性を検討する余地があること、また田中発表で任意の *es* はどちらかという構造的説明がなされたが、これについても任意の *es* を想定せず、*es* がある場合とない場合を構文文法的な観点から別の機能を有する構文として設定し、任意の *es* はそれらの構文の解釈の揺れによって機能的に説明できる可能性があるといった指摘が、宮下によりなされた。またこの全体に関わる質疑と関連して、さらに *es* の指示性や統一性、*man* におけるアクセントの有無なども話題となり、活発で有意義な議論が行われた。

以上、本シンポジウムは *es* が示すさまざまな地平としての用法に対し、まずはそれぞれの発表者がそれぞれの視点で取り組むという形であったものの、最終的にはさらにそういった視点が交差する形で議論が進められたと言える。これは今後、発表者それぞれの *es* に関する研究において、十分に生かされていくものと思われる。シンポジウムにおいてさまざまなコメントを寄せていただき、議論に加わっていただいた参加者の皆様に感謝申し上げます。

参考文献

- 山崎祐人 (2020): 「ドイツ語の分裂文における人称代名詞と語順の統語構造」 In: 森芳樹 (編) 『統語と意味のインターフェイスをめぐって—カートグラフィーの射程—』 (日本独文学会研究叢書 140)、15–29. 日本独文学会
- Weinrich, Harald (⁶2001): *Tempus: Besprochene und erzählte Welt*. München: Beck.

日本独文学会研究叢書 166号
2026年10月17日発行
© 2026 一般社団法人日本独文学会

Studienreihe der Japanischen Gesellschaft für Germanistik

Nr. 166

Alle Rechte vorbehalten

©2026 Japanische Gesellschaft für Germanistik e.V. Tokyo

es が指し示す地平：いつ、なぜ es が現れるのか

編集 宮 下 博 幸

発行 一般社団法人日本独文学会

〒170-0005

東京都豊島区南大塚 3-34-6-603

電話 03-5950-1147

メールフォーム <http://www.jgg.jp/mailform/buero/>

SrJGG

ISBN 978-4-908452-56-7